

本川原遺跡

—鳥栖市永吉町所在遺跡発掘調査報告書—

第3次調査

1979・3

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第49集

本川原遺跡

第3次調査

1979・3

佐賀県教育委員会

序

この報告書は、佐賀県教育委員会が建設省佐賀国道工事事務所からの委託により、昭和53年度に実施した、鳥栖市永吉町本川所在の「本川原遺跡」発堀調査の記録であります。

近年、この地域の開発はめざましく、九州縦貫・横断高速自動車道とそのインターチェンジの建設、及び国道3号線の改良工事に伴い、過去2回の調査が実施され、本調査で第3次にあたります。

ここに、「本川原遺跡」の第3次報告書を刊行することになりましたが、これまでの成果と共に、古代文化の研究はもとより、今後の文化の向上に役立てていただきたいと思います。

なお、調査にあたって鳥栖市教育委員会、並びに地元の方々の深いご理解と献身的なご協力をいただきましたことを心からお礼申しあげます。

昭和54年3月

佐賀県教育委員会

教育長 古 藤 浩

1. 本書は、昭和53年7月28日から昭和53年9月26日までに佐賀県教育委員会が、建設省佐賀国道工事事務所から委託を受け発掘調査した本川原遺跡の報告書である。

鳥栖市永吉町本川地先の永吉交差点横断地下道取付け道路建設に先立つ緊急発掘調査で、第3次調査にあたる。

2. 発掘調査は佐賀県教育委員会が主体となり、鳥栖市教育委員会の協力をえて実施した。

3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I	杠 一 義
II	藤 濑 権 博
III	杠 一 義 藤 濑 権 博
	石 橋 新 次
IV	杠 一 義 藤 濑 権 博 石 橋 新 次

4. 遺構の実測は江口政徳・三浦亮・杠一義がこれにあたり、遺物の実測は、土器を石橋新次、石器を藤瀬権博があたった。製図・拓本は、藤瀬権博・石橋新次、遺構写真は、藤瀬権博・杠一義がおこない、遺物写真は藤瀬権博があたった。また、遺跡周辺地形実測は藤瀬権博・江口政徳・杠一義がおこなった。

5. 第1・第2次調査分の資料掲載にあたっては調査担当者木下巧より快諾をえた。記して謝す。

6. 航空写真は鳥栖市報担当から提供を受けた。

7. 本書の編集は、杠一義が担当した。

本文目次

序	
I 調査の経過	
1. 調査に至るまで	1
2. 第3次発堀調査の経過	2
II 遺跡の立地と環境	
1. 市内全域	7
2. 遺跡周辺	9
III 遺構と遺物	
1. 遺構と遺物の概要	12
2. 繩文時代	12
3. 弥生時代	17
4. 古墳時代	18
5. 歴史時代	19
IV まとめ	
1. 第3次発堀調査のまとめ	
(1) 本遺跡出土の黒川式土器について	24
(2) 調査のまとめ	25
2. 本川原遺跡全体のまとめ	
(1) 第1・第2次調査出土土器について	28
(2) 第1～3次調査のまとめ	36

挿図目次

第1図	鳥栖市内の遺跡分布図	折り込み
第2図	本川原遺跡第3次調査遺構配置図	折り込み
第3図	本川原遺跡第3次調査周辺地形図	11
第4図	袋状竪穴実測図	13
第5図	1号袋状竪穴出土土器実測図	14
第6図	2号袋状竪穴出土土器実測図	15
第7図	ピット1出土土器実測図	15
第8図	袋状竪穴、その他出土石器実測図	16
第9図	弥生時代土器実測図	17
第10図	古墳時代須恵器実測図	18
第11図	1号住居跡実測図	18
第12図	2・3号住居跡実測図	20
第13図	1・2号溝土層断面図	21
第14図	溝・包含層出土土器実測図	22
第15図	第2次調査6号住居跡出土土器実測図	27
第16図	第2次調査6号住居跡出土土器実測図	28
第17図	第2次調査8号住居跡出土土器実測図	29
第18図	第2次調査5号住居跡出土土器実測図	29
第19図	第2次調査1号方形周溝墓出土土器実測図	30
第20図	第2次調査B-5・6区U字溝包含層出土土器実測図	31
第21図	第2次調査古墳～歴史時代出土土器実測図	34
第22図	本川原第1・2次調査地形測量図	37

一覧表目次

表 1. 烏栖市内遺跡地名表.....	4 ~ 6
2. 本川原遺跡住居跡一覧表.....	41

図版目次

図版 1. 本川原遺跡航空写真〈南から〉	42
2. 本川原遺跡航空写真〈北から〉	43
3. (1) 第3次調査区遠景〈北西から〉	44
(2) 第3次調査区遠景〈北から〉	44
4. (1) 本川原遺跡段丘〈東から〉	45
(2) 第1次調査区遠景〈南西から〉	45
5. (1) 表土剥ぎ後の状態〈北東から〉	46
(2) 発堀区全景〈西から〉	46
6. (1) 発堀区全景〈中央から西へ〉	47
(2) 発堀区全景〈中央から東へ〉	47
7. (1) 1号袋状竪穴〈東から〉	48
(2) 2号袋状竪穴〈西から〉	48
8. (1) 2号袋状竪穴遺物出土状態.....	49
(2) ピット1土器出土状態.....	49
9. (1) 1号住居跡〈西から〉	50
(2) 1号住居跡・2号溝切合い状態.....	50
10. (1) 2号住居跡〈発掘前〉	51
(2) 2号住居跡〈南から〉	51
11. (1) 3号住居跡〈発掘前〉	52
(2) 3号住居跡〈南から〉	52

12. (1) 1号溝〈発掘前〉	53
(2) 1号溝〈北東から〉	53
13. (1) 2号溝〈発掘前〉	54
(2) 2号溝〈南から〉	54
14. (1) 1号溝土層堆積状態	55
(2) 2号溝土層堆積状態	55
15. (1) 縄文時代出土土器	56
(2) 石器	56
16. (1) 古墳時代以降出土土器	57
(2) 予備調査状況〈東から〉	57
17. (1) 発掘風景〈表土剥ぎ〉	58
(2) 発掘風景〈遺構検出〉	58
18. (1) 発掘風景〈遺構掘り〉	59
(2) 発掘風景〈遺構掘り〉	59
19. 第1次調査方形周溝墓出土土器	60
20. 第2次調査6号住居跡出土土器	61
21. (1) 第2次調査5号住居跡その他出土土器	62
(2) 第1次調査方形周溝墓土器出土状態	62

I. 調査の経過

1. 調査に至るまで

背振山地から派生する大小の河川は、山麓部に舌状丘陵地、そして佐賀平野を形成しながら筑後川及び有明海へと流入する。佐賀平野東方には、背振山地の一つ、九千部山(847.5m)を主役とする杓子ヶ峰などの支峰から、秋光川、本川川、山下川、大木川、安良川などが南流し、多くの舌状丘陵地をつくる。杓子ヶ峰からのびた丘陵は、西に大木川、東に山下川をいだきながら、両河川の合流地点まで、ほぼ南東にのびる。山下川の支流である本川川が、大きく北東に曲線をえがき、そして南下してできる北東に突出した小丘陵地東端一端を総称して本川原遺跡と呼んでいる。

この杓子ヶ峰からのびた丘陵地一帯は、古代から歴史時代までの数々の遺跡が存在し、遺跡の宝庫の観を呈している。例えば、縄文時代から古墳時代までの複合遺跡である安永田遺跡、弥生時代の豪棺墓群を有する田代公園・八並・荻野豪棺・河原田北・前田・フケ・田代天満宮東方・恒石などの遺跡が知られている。古墳時代には、史跡に指定されている装飾古墳の田代太田古墳、その他に東田・太田東方古墳などの円墳があり、また県史跡に指定されている刺塚・庚申堂塚、その他岡寺などの前方後円墳が所在する。山麓部には杓子ヶ峰・永田・大平・神山・本陣などの古墳群が広く分布する。

本川原遺跡の存在については、遺物の散布状態によって、以前から知られていた。特にこの地域は、古来、交通の要地として重要な位置を占めており、近年もこの重要性は変わらず福岡・熊本・佐賀の要として、九州縱貫・横断高速自動車道鳥栖インターチェンジ、国道3号線と国道34号線の分岐点が存在し、国鉄鹿児島本線も貫通している。加えて、大型工場などの進出で開発が著しい地域である。

本川原遺跡の発掘調査は過去2回実施され、今回は第3次の調査にあたる。

第1次発掘調査は昭和48年度、九州縱貫・横断高速自動車道の鳥栖インターチェンジ設置による国道3号線拡幅工事に伴うもので、建設省佐賀国道工事事務所の依頼により佐賀県教育委員会が実施した。調査区域は国道3号線東沿いの低丘陵末端部にあたり、調査区域より東は緩傾斜で宅地、水田と連続し、本川原に落ち込む。

遺構としては、この段丘末端の最高地点に、方形台状部が南北13.4m、周溝の上面幅最大2.5m、最小1.5mで内部主体が「へ」の字状にわん曲した土壙墓を有する方形周溝墓、そして台状部が東西7.75m、周溝の上面幅約1mの方形周溝墓が確認された。また、縦5.3m、横4.0mの長方形で北壁35cm、南壁25cmの高さを持つ住居跡など住居跡5、その他土壙、溝状遺構などが確認された。(註1)

第2次発掘調査は昭和49年度、国道3号線改良工事に先立つもので、建設省佐賀国道工事事務所の依頼により佐賀県教育委員会が実施した。調査区域は、第1次調査の西方、国道3号線と国道34号線分岐点の内側、国鉄鹿児島本線東方に位置する。遺構としては、段丘末端の一つの頂点部に所在する東壁7.1m、西壁7.4m、南壁5.2m、北壁4.6mでは長方形を呈し、床面の北壁と南壁に沿ってベッドを有する住居跡など住居跡5、その他貯蔵穴、土壙などが確認された。（註2）（文責 杠）

2. 第3次発掘調査の経過

第3次発掘調査を実施した本川原遺跡は、鳥栖市永吉町本川に所在する。この調査は国道3号線と国道34号線分岐点（永吉交差点）の改良工事に伴う横断地下道取付け道路建設予定地について、建設省佐賀国道工事事務所から発掘調査の依頼が契機になった。永吉町の東方からきた市道が永吉交差点で地下道となり、国鉄鹿児島本線東側まで西進し、それより北上する回して国道3号線に通じる道路建設予定地で、国道西方の取付道路敷地2,500m²が調査対象地域であった。その内、地下道予定地から国鉄鹿児島本線までの区間は、既成道路及び宅地造成の際、既に厚く削平されており、遺構の存在は考えられず、踏切より北部について発掘調査が必要であった。まず、昭和53年2月21日から2月28日まで鳥栖市教育委員会によって予備調査が実施された。その結果、1,040m²の範囲で、溝・住居跡などの遺構が確認され、また、高杯などの土器片も出土し本調査の必要性が生まれた。その後、具体的な協議を重ね建設省佐賀国道工事事務所からの委託事業として佐賀県教育委員会が発掘調査を担当することになった。

発掘調査は、例年ない酷暑の中、鳥栖市教育委員会及び地元の方々の協力を得て、昭和53年7月28日より作業開始、9月26日まで約2ヶ月間の調査であった。（文責 杠）

調査組織

- 調査委託者 建設省佐賀国道工事事務所
- 調査受託者 佐賀県（調査担当・佐賀県教育委員会）
- 調査責任者 高島忠平 県文化課調査第1係長
- 調査員 杠 一義 県文化課調査第1係
藤瀬楨博 鳥栖市教育委員会社会教育課
石橋新次 鳥栖市教育委員会社会教育課臨時職員
- 調査補助員 江口政徳 福岡大学生

- 整理作業員 西口君代・山本美代子・倉成富士子・川口ヒデ子・前田徳子・古賀ミヨ子・古賀砂江・杉岡テルヨ
- 作業員 秋吉ヤツエ・毛利恵子・古賀ミヨ子・長ヒデ子・松隈希以子・中島貞子・西口キチ・久保山ハルエ・成富イネ・時シマ子・西口君代・藤田サチヨ・藤田サカエ・藤田トモエ・藤田タミエ・藤田フサ子・山本ヨシ子・伊藤篤代・斎藤ヨシ子・紫村芳文・大塚啓二・梅津宏之・有馬孝・山本博文・三浦亮田範誠一

発掘調査日誌（1978年7月28日～9月26日）

- 7月28日 ユンボによる表土はぎ、国鉄鹿児島本線跡部より作業開始、溝存在。（1号溝）
- 7月29日 ユンボ作業続行。1号溝北面にピット群、公民館直下に方形遺構存在。（2号住居跡）
- 7月31日 ユンボ作業続行、公民館北東で南北に走る溝存在。（2号溝）
- 8月1日 ユンボ作業続行。2号溝東にピット群、廻入れ式、路切側より作業開始。
- 8月2日 ユンボ作業続行、ピット東には溝見あたり。1号溝とその北側遺構検出、溝北側にピット群存在（第1ピット群）、ピット中に黒色土を含むものあり。
- 8月4日 ユンボ作業終了、農道東部に数個のピット存在。1号溝とその南側遺構検出、溝は南西から北東に走り幅が広くなる。溝南に方形遺構検出（3号住居跡）。溝の掘り方、土器少なし。
- 8月5日 1号溝断面はV字形であるが途中段位を持つ。
- 8月7日 1号溝より土器片器、石頭など出土。
- 8月8日 1号溝は北東に行くに従い深く、幅を増す。溝底部より須恵器片出土。溝断面変倒。
- 8月9日 作業、8月16日まで休み。実測のための基本点を回面より落とし軸線決定。
- 8月10日 基本点より直角に点を派生。
- 8月11日 500分の1で地形実測開始。
- 8月12日 地形実測（9月12日まで地形実測休み）。
- 8月17日 作業再開。第1ピット群の掘り方。不規則ピットで性格不明。
- 8月18日 第1ピット群の掘り方。3号住居跡の掘り方、上部が削平され溝に切られる。
- 8月19日 2号住居跡の遺構検出、内側プラン不鮮明で数個のピット存在。
- 8月21日 2号住居跡の掘り方。2号溝の遺構検出。北方プランが不鮮明で検出の繰り返し。溝北東部に方形遺構検出。（1号住居跡）
- 8月22日 2号溝の掘り方、南で木炭出土、底部は平坦をなす。3号住居跡の掘り方、一部溝に切られる。
- 8月23日 2号溝の東方、ピット群掘り方（第2ピット群）、最大ピットより縄文土器出土。（2号貯藏穴）。
- 8月24日 第2ピット群から西方の溝。第1ピット群北方に調査区域拡張のため草刈り。2号貯藏穴の写真及び実測、2号溝断面実測。
- 8月25日 調査区域拡張部分の表土はぎ及び遺構検出。
- 8月28日 前日部分の掘り方、最大ピットより縄文土器出土（1号貯藏穴）、貯藏穴南に帯状ピット存在。
- 8月29日 第2ピット群東の遺構検出。
- 8月30日 第2ピット群東の掘り方、新しい帯状遺構が東西に走る。
- 8月31日 前日の作業続行、数個のピット存在。
- 9月1日 農道東の遺構検出。レベル基準点を測定。
- 9月2日 前日の掘り方、不規則なピット存在。農道西方の写真撮影。遺構実測開始。
- 9月4日 前日の作業続行。
- 9月5日 前日の作業続行。後日写真撮影。
- 9月6日 農道東の実測、調査区域拡張部分の埋め戻し。
- 9月7日 前日の作業続行。
- 9月8日 前日の作業続行。東端よりユンボによる埋め戻し。2号溝まで実測終了。
- 9月9日 前日の作業続行。
- 9月11日 前日の作業続行。
- 9月12日 ユンボによる埋め戻し終了。発掘後仕事と器材撤去。
- 9月13日～9月26日 地形実測。

註 (1) 木下 巧 「本川原遺跡」『佐賀県文化財調査報告書第26集』佐賀県教育委員会 1974

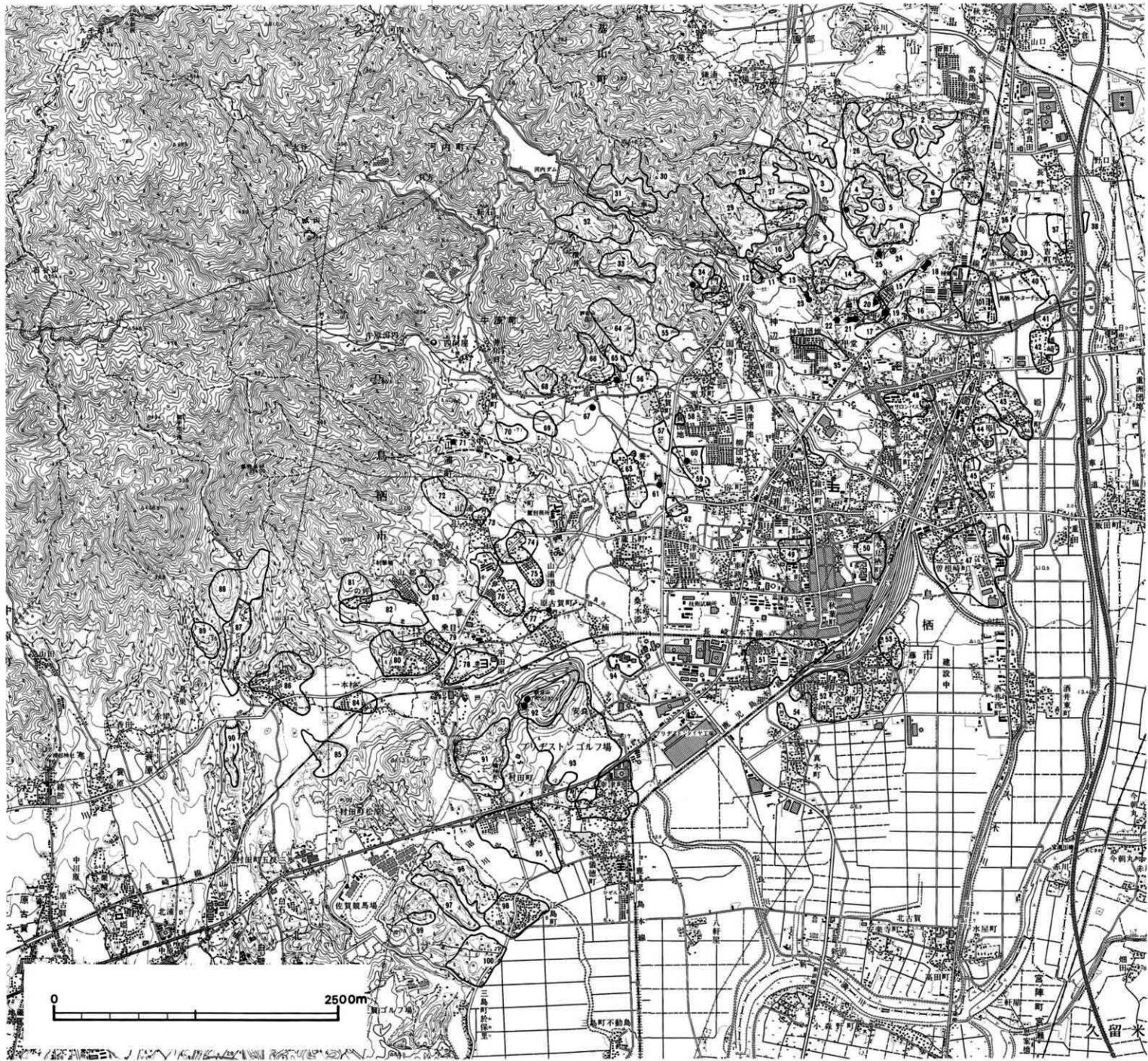
(2) 木下 巧 「本川原遺跡第一次調査」『佐賀県文化財調査報告書第32集』佐賀県教育委員会 1975

表1. 烏栖市市内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	内容	備考
1	袖比梅坂遺跡	袖比町字梅坂	高位段丘	弥生	腰棺墓群	
2	八ツ並遺跡	今町字八並	*	*	腰棺墓群、遺物散布地	
3	うつろ坂遺跡	袖比町字梅坂	*	*	腰棺墓群、遺物散布地	1964県・市調査④
4	大久保遺跡	袖比町字大久保	*	弥生～古墳	腰棺墓群、土器・土師器・須恵器散布地	1977市確認調査
5	梅坂風化米道跡	今町字梅坂	*	*	腰棺墓3基、土塙墓5基、住居跡12軒、倉庫跡2軒その他	1978市確認調査⑪⑫
6	岸田遺跡	今町字大地添	*	弥生	腰棺墓群（大半破壊）その他	1977市予備調査
7	今町腰棺遺跡	今町字岸田	中位段丘	*	腰棺墓群	
8	平原遺跡	袖比町字平原	高位段丘	弥生～古墳	住居跡14軒、V字溝、石棺墓、その他	1978市確認調査
9	前田遺跡	袖比町字前田	*	弥生	遺物散布地	
10	田代公園遺跡	袖比町字荻野	*	*	腰棺墓群	1973県・市調査
11	河原田北遺跡	神辺町字河原田	*	*	腰棺墓群、石棺墓群	
12	河原田南遺跡	神辺町字河原田	*	弥生～中世	石棺墓・土塙墓群・古墳その他	1970県調査
13	荻野腰棺遺跡	袖比町字荻野	中位段丘	弥生	腰棺墓群	
14	安永田遺跡	袖比町字安永田	*	縄文～古墳	河高式土器、腰棺墓群（銅戈・鉄剣）、遺物散布地	①②④⑤⑦⑨
15	フケ遺跡	田代本町字桂添	*	弥生～古墳	腰棺墓・石棺墓群・古墳その他	
16	田代天満宮東方遺跡	田代本町字中尾	*	弥生	腰棺墓（95基）	1973県調査⑩
17	畠ヶ田遺跡	田代本町字畠ヶ田	*	弥生～古墳	腰棺墓、遺物散布地	1971県調査⑪
18	劍冢前方後円墳	田代本町字持添	*	古墳	全長80m、内部主体不明、円筒形埴輪	1974墳丘測量⑮⑯⑭⑯
19	太田東方古墳	田代本町字太田	*	*	円墳、横口系堅穴石室（？）、丹波布（破壊）	1964年墳丘測量⑯
20	東田古墳	田代本町字太田	*	*	前方後円墳か？、円墳径30m、内部主体不明	
21	岡寺前方後円墳	田代本町字田代	*	*	全長65～70cm（復原）、内部主体不明、円筒・人物・動物埴輪	
22	田代太田古墳	田代本町字太田	*	*	盤曲系・追持式袋形古墳、円墳径34m、一段築成	1975～6保存工事③⑤⑥⑩⑪⑫
23	庚午堂塚前方後円墳	神辺町字庚午堂	*	*	全長60m、横穴式石室、丹波布（破壊）・人物・動物埴輪	1973年墳丘測量、1975県調査⑬⑭
24	平原古墳	袖比町字平原	*	*	箱式石棺墓	1978市確認調査
25	愛宕山古墳	袖比町字平原	高位段丘	*	円墳、墳丘消滅	⑤
26	梅坂古墳群	袖比町字梅坂	*	*	円墳6基（他は破壊）	
27	永田古墳群	袖比町字永田	山麓	*	円墳29基、2・3・4号墳より鐵器・子持壺・瓶等出土	⑩
28	大平古墳群	袖比町字大平	*	*	円墳2基（他は破壊）	
29	神山古墳群	袖比町字神山	*	*	円墳20基（A～C群）	
30	杓子ヶ峰古墳群	神辺町字谷口	*	*	円墳14基	
31	東十郎古墳群	河内町字東十郎外	*	*	円墳73基（1～7特別区）、須恵器・鉄器類多数出土	1964県調査⑪
32	十三塚古墳群	河内町字門谷	*	*	円墳11基（他は破壊）	

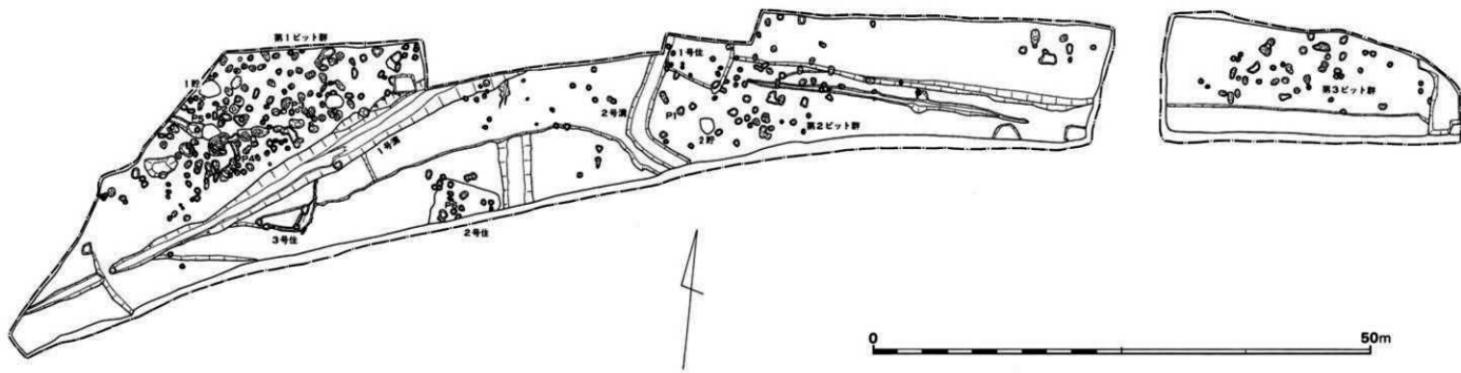
番号	遺跡名	所存地	立地	時期	内 容	備 考
33	横井古墳群	河内町字横井	山麓	古 墳	円墳4基(他は破壊)、金環その他出土	1973市調査
34	門前遺跡	神辺町字門前	高台段丘	縄文～古墳	縄文土器・土師器・須恵器散布地、円墳・横穴式石室	
35	加藤田遺跡	神辺町字加藤田	中位段丘	古 墳	住居跡等	1975県子備調査
36	長ノ原遺跡	永吉町字長ノ原	低位段丘	縄文～中世	旧河川、V字溝、井戸等、瓦質土器、磁器等も出土	1978市調査
37	永吉・村上遺跡	永吉町字村上	*	弥生～古墳	遺物散布地	
38	永吉遺跡	永吉町字正口	*	古 墳	環溝集落	1969県調査
39	株宣賀遺跡	永吉町字株宣賀	*	弥生～古墳	遺物散布地	
40	南西川遺跡	永吉町字南西川	*	弥 生	甕棺墓・土塙墓群その他	⑩
41	立田石遺跡	幡崎町字立田石	*	弥生～古墳	甕棺墓・遺物散布地	④
42	幡崎遺跡	幡崎町字幡崎	*	*	遺物散布地	
43	姫方遺跡	姫方町字姫方	*	*	遺物散布地	
44	本原遺跡	原町字本原	*	*	遺物散布地	
45	下原遺跡	原町字下原	*	弥 生	甕棺墓群	④
46	恒石遺跡	原町字恒石	*	*	甕棺墓群	④⑤
47	四ツ木遺跡	曾根崎町字四ツ木	*	*	土器散布地	④⑤
48	田代大官町遺跡	田代大官町字下町	中位段丘	古 墳	木器(鐵)、須恵器散布地	1958県調査⑪
49	古野遺跡	古野町字町上	*	古墳～中世	土器散布地	
50	京町遺跡	鳥島橋町字京町	*	弥 生	甕棺・石棺墓群、鉄津、土器散布地	④
51	内畠遺跡	元町字内畠	*	弥生～中世	甕棺墓群、土器散布地	
52	今泉遺跡	今泉町字泉畠	低位段丘	*	石棺墓群、土器散布地	1962県調査⑨
53	藤木遺跡	藤木町字西の坪	*	*	石棺墓群、土器散布地	
54	真木遺跡	真木町字宮の前	自然堤防	*	土器散布地	1979市子備調査
55	都谷遺跡	萱方町字都谷	山 麓	弥生～古墳	土器散布地	
56	古賀天満宮遺跡	古賀町字宮の後	*	縄文～古墳	土器散布地、古墳群	
57	花の木遺跡	古賀町字花の木	扇状地	縄文～中世	土器散布地、甕棺墓	1978市子備調査
58	元古賀遺跡	古賀町字元古賀	*	中 世	旧河川状遺構、土師器・須恵器・木器包含	1979市子備調査
59	古賀遺跡	古賀町字稻塚	*	縄文～江戸 満・築造・水田用水路・青磁その他	1978～79 市教委調査⑫	
60	福塚古墳	古賀町字福塚	*	古 墳	円墳、径30m(推定)、横穴式石室全長11m	④
61	塩塚古墳	牛原町字中原	*	*	円墳、径30m(推定)、内部主体不明	
62	布津原遺跡	布津原町字布津原	*	古墳～中世	土師器・須恵器・土器散布地	
63	養父遺跡	養父町字古蓮輪	*	縄文～中世	遺物散布地、郡衙跡か?	
64	群石古墳群	牛原町字中原	山 麓	古 墳	詳細不明(大半破壊)	
65	城山古墳群	牛原町字中原	*	*	円墳 6基	
66	牛原古墳群	牛原町字牛原	*	*	円墳 8基	

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	内 容	備 考
67	百度塚古墳	牛原町字前田	扇状地	古 墳	円墳(墳丘破壊)、横穴式石室全長8m	
68	割石古墳群	牛原町字牛原	山 麓	*	円墳3基、土師器散布地	
69	山浦新町	山浦町字新町	扇状地	*	遺物散布地	
70	三本谷遺跡	山浦町字三本谷	*	*	遺物散布地	
71	中ノ原古墳群	山浦町字中ノ原	山 麓	*	円墳2基(1基は径15m) 他に2~3基(?)	
72	山浦西北方古墳群	山浦町字谷頭	高位段丘	*	円墳4基(他は破壊)	⑫
73	古野古墳群	山浦町字古野	*	*	円墳3基	
74	五本谷遺跡	山浦町字五本谷	中位段丘	古墳~中世	黒曜石・須恵器・青磁散布地、古墳破壊	1978市予備調査
75	山浦古墳群	山浦町字山浦	*	古 墳	円墳10基・土壤墓(?)	⑬
76	麓遺跡	山浦町字郷町	*	弥 生	石器(石斧)・土器散布地	1978市予備調査
77	原古賀遺跡	原古賀町字二本松	低位段丘	古墳~中生	石器・土師器・土器散布地、古墳1基(破壊)	
78	薄尾古墳群	原古賀町字平田原	*	繩文~古墳	小円墳30基(推定)、竪穴式石室 彷彿鏡・鉄劍・玉類その他	⑭
79	乗目遺跡	平田町字乗目	中位段丘	古墳~中世	土師器散布地	
80	平田原遺跡	平田町字東前	*	繩文~古墳	遺物散布地	
81	一の坪遺跡	山都町字一の坪	高位段丘	弥生~中世	石器・土器・土師器散布地、古墳(大半破壊)	
82	一の坪条里遺跡	山都町字宮の下	谷	*	条里制	
83	山都町遺跡	山都町字山都	高位段丘	古 墳	須恵器散布地(古墳破壊?)	
84	一本杉遺跡	立石町字一本杉	低位段丘	弥生~古墳	箱式石棺か石蓋土壤墓	
85	野瀬遺跡	立石町字野瀬	*	*	石器散布地	
86	立石遺跡	立石町字立石	中位段丘	古墳~中世	土師器・須恵器・土器散布地	
87	山田遺跡	立石町字山田	中位段丘	古 墳	土師器・須恵器散布地	
88	立石古墳群	立石町字立石	山 麓	*	円墳7基	
89	立石開拓古墳群	立石町字立石	*	*	円墳3基(他は破壊)	
90	笛吹山遺跡	立石町字五反田	高位段丘	繩文~古墳	阿高式土器片・ポイント、古墳(大半破壊)	
91	村田古墳群	村田町字朝日	山 麓	古 墳	円墳12基(他は不明)	
92	朝日山古墳群	村田町字朝日	*	*	円墳2基(他は不明)	
93	安良遺跡	村田町字赤沼外	中位段丘	弥 生	甕棺墓群(大半は破壊)	
94	幸津遺跡	幸津町字本庄	低位段丘	弥生~中世	石棺(直刀)・土器・石器散布地	
95	三本松遺跡	村田町字三本松	*	繩文~古墳	旧河川状構造、土器・石器・木器包含	1979 市教委予備調査
96	相模遺跡	江島町字相模	中位段丘	弥生~古墳	甕棺墓群・石器・須恵器散布地	
97	天神記遺跡	江島町字天神記	*	*	甕棺墓群・円墳6基(大半破壊)	
98	江島遺跡	江島町字江島	低位段丘	弥生~中世	土器散布地	
99	狂言谷遺跡	江島町字狂言谷	中位段丘	繩 文	石器散布地	
100	本行遺跡	江島町字本行	低位段丘	弥生~中世	石器・土器・須恵器散布地	
101	本川原遺跡	水吉町字本川	*	繩文~歴史	方形周溝墓、住居跡その他	1973・1974 県調査



第1図 岩手市内の道路分布図 (1/25000)

1979. 1 現在



第2図 本川原道路第3次調査遺構配図図 (1/200)

II. 遺跡の立地と歴史的環境

1. 市内全域

地理的環境

鳥栖市は筑紫平野の最奥部西北端に位置し、北は九千部山を隔てて福岡平野、南は筑後川を挟み久留米市、西には佐賀平野、東に小郡一帯の平野と丘陵が並がっている。背後に背振山地が屏風の如く連なり、前面には筑後川が悠々と流れている。山麓斜面は南に面し、暖かい陽射しを受ける。山地があり、丘陵地があり、平坦地がある変化に富んだ地勢をこの地域は占めている。

背振山地の一支嶺である九千部山(848m)を主峰とし、南東に権現山(626m)・南に城山(501m)・南西に石谷山(754m)が三方に分岐している。権現山はさらに杓子ヶ峰(312m)に通じ、袖比・今町地区の高・中位段丘へと至っている。この段丘群には小さな谷が縦横に奥深くはいり込んでおり、段丘と谷との比高差は30~10m程である。そして永吉・曾根崎等の中・低位段丘へと通じる。本遺跡はこの地区に所在する。城山は群石山(201m)に続き、袖辺扇状地と養父扇状地を両脇にかかえて、更に市街地・藤ノ木・今泉町等を形成している低位段丘へと至っている。石谷山は雲野尾崎(400m)を経て、山麓から平坦地へと南下している。また、その先に古生代の結晶片岩からなる朝日山(133m)等が横たわっている。江島町一帯には北茂安町からの丘陵が派生してきている。

平坦地は広大な冲積平野で、肥沃な水田地帯となっている。筑後川・宝満川沿いには、酒井・高田・下野等の自然堤防が形成されており、周囲の水田面より50~70cm程の微高地となっている。

また、九千部山とその支嶺からは多くの河川が流れ出している。袖比・今町地区の丘陵地からは小溪流が流れ出し本川となり、更に山下川と合流し南下している。河内盆地から始まる大木川は袖辺扇状地を形成しながら下流して、山下川を合流している。九千部山を水源とする四阿屋川は山麓で養父扇状地を形成し安良川となる。沼川は石谷山を水源として、いくつかの小河川を合流して南下している。また、その他にも秋光川・前川・轟木川・薬師川等も山地から水を集め筑後川へと合流している。多くの河川が流れる鳥栖地域は洪水常襲地帯として有名であった。しかし、その反面水量が非常に豊かで澫水を知らない。

歴史的環境

以上のような鳥栖地域にみられる地勢は、人間の生活条件としての適合性と多様性をもついている。従って歴史的にもかなり遡れる人々の生活の痕跡を、幾重にもたどる事ができる。それは生産技術（主に農業・治水技術）の発展と共に変化・拡大している。

山麓地帯と段丘上には、まだまだ発見例は少ないが、先土器～繩文時代の遺跡が数多く所在するものと考えられる。永吉町長ノ原遺跡では、先土器時代のものと思われる刃器と細石刃が流れ込みであるが出土している。袖比・安永田遺跡からは繩文時代後期の御手洗式と判断される土器片が発見されている。また、立石町笛吹山からは中期阿高式土器が発見されたという報告がある。最近の調査例では、古賀遺跡から繩文時代前期森式土器と思われる土器片が出土した。古賀遺跡・長ノ原遺跡からは晩期夜臼式土器が、村田町三本松の子備調査では後期から晩期にかけての土器片が出土している。今後もますます発見例は増加すると思われる。

高～低位段丘上には弥生時代から古墳時代までの遺跡が多い。斐棺包蔵遺跡はもちろんのこと、集落遺跡にも枚挙にいとまがない程である。特に袖比遺跡群と称する袖比・今町地区には集中している。段丘上に住居と墓地を営みなみ、縱横に発達した谷あいに水田を営なんている。1914（大正2）年の秋野溜池築造並びに耕地整理の際、細形銅戈・鉄劍等が斐棺内より出土した安永田遺跡が最も著名な遺跡として知られる。斐棺包蔵遺跡としてはその他にも、袖比・梅坂遺跡・八ツ並遺跡・大久保遺跡・うつろ坂遺跡・田代公園遺跡・荻野斐棺遺跡・フケ遺跡・田代天満宮東方遺跡等が掲げられる。また、集落遺跡としても上記例と重複する例を除いても、岸田遺跡・平原遺跡・前田遺跡等が知られている。現在、この袖比・今町地区は10か年計画で範囲確認調査（詳細な分布調査）を約200ヘクタール対象にして進めている。袖比・今町地区から派生している永吉・姫方町一帯の中・低位段丘上にも弥生時代の数多くの遺跡がみられる。主には集落遺跡である。永吉村上遺跡・永吉遺跡・幡崎遺跡・姫方遺跡・本原遺跡・四ツ木遺跡等である。現在、市街地となっている一帯には斐棺墓や石棺墓があったと聞くが、詳細は不明である。しかし先端部の藤ノ木・今泉町周辺には弥生時代土器片や斐棺片の散布がみられる。石棺墓も確認されている。朝日山南麓一帯は現在、アリデストンタイヤのゴルフ場や自転車工場となっているが、その造成の際膨大な量の斐棺が破壊されている。約50ヘクタールの大半が破壊されてしまっている。先述した村田町三本松遺跡では、旧河川状遺構より出土した土器から判断してかなり長期に亘る大規模な集落遺跡の存在が確認された。江島町一帯の丘陵上には斐棺遺跡が、南東斜面には集落遺跡がかなり良好な状態で残っているものと判断された。

古墳時代の遺跡としては、無数と言える程築造されている群集墳がまず大きな特徴として掲げられよう。海拔標高70～200m級の山麓地帯には北東から南西方向にかけて殆んど隙間なくベルト状に分布している。北東から、永田古墳群・神山古墳群・都谷古墳群・杓子ヶ峰古墳群・東十郎古墳群・群石古墳群・割石古墳群・山浦古墳群・立石古墳群等が代表例として掲げられる。また、そのベルト地帯よりもやや南にさがった朝日山山麓から村田町にかけても群集墳が分布している。さらに南の江島町の丘陵一帯にも古墳が群集している。袖比町荻

野の丘陵上には前方後円墳が数基群在している。剣塚前方後円墳・岡寺前方後円墳・庚申堂塚前方後円墳である。また、東田古墳も前方後円墳としての可能性が考えられる。これまで前方後円墳の可能性が指摘されていた平原古墳については、丘陵頂上部に築造された箱式石棺墓である事がわかった。装飾古墳として著名な田代太田古墳も荻野の丘陵上に所在している。既に破壊されてしまっているが、豎穴系横口式石室の太田東方古墳も同丘陵上に在った。集落遺跡では大半が弥生時代のものと重複するが、神辺・妻父・村田町等の扇状地にも古墳時代から中世にかけての集落の存在が推定される。特に妻父地区には都街跡の所在が推定されている。現在、市街地となっている地区には中世の石鍋・土鍋等の遺物が広く散布している。

以上が鳥栖市内の遺跡の分布状態の概略である。これまで分布調査についてはかなり多くの時間と労力が費やされてきたが、まだ量的にも質的にも完全なものではない。それ程鳥栖市の埋蔵文化財は“量の豊かさ”と“質の高さ”を誇っていると言える。本文に掲載した遺跡は現段階で判明している主なものである事をお断わりしておきたい。（文責 藤瀬）

2. 遺跡周辺

地理的環境

本川原遺跡は鳥栖市水吉町字本川原・本川に所在し、国道3号線・34号線の合流点近くにあたる。遺跡の立地する丘陵は袖比町荻野から派生してきており、本川原付近で大きく屈曲し曾根崎へと至っている。その屈曲部の東端丘陵上に立地している。従って、袖比遺跡群の縁辺地区として位置付けられる。北西方向約350mの丘陵頂上部には剣塚前方後円墳がある。

本川原遺跡の所在する段丘は海拔標高20~30mで、段丘下は比高差約3mで本川川が流れている。その東側は一旦、水田となるが、更に東側は長ノ原から轔崎へと連なる低位段丘でさえぎられている。遺跡南側は現在、農業工場と実験農場があり、更に九州縱貫道・横断道インターで区切られ水田となっている。西側は丘陵がゆるやかに上の傾斜地となり、現在養鶏場となっている。今回、調査したのが丘陵北端で水田との比高差1m未満である。地目は畑地と里道となっていた。第2次調査区域は台地中心部で、第1次調査区域は台地東南端である。

歴史的環境

先述したように本遺跡は袖比遺跡群の縁辺部にあたり、袖比遺跡群との関係を抜きにして本遺跡の歴史的環境は語れない。同一丘陵上には剣塚・岡寺・庚申堂塚前方後円墳や田代太田古墳等が分布している。以上の古墳は主に6世紀代の墳墓である。5世紀代のものとしては太田東方古墳・平原石棺遺跡等が推定される。本遺跡第1次調査出土の方形周溝墓はそれらに先行する墳墓として位置付けられる。また、弥生時代の妻父古墳では同丘陵上に田代天満宮東方遺跡・フケ遺跡・安永田遺跡等の大規模な妻父古墳墓地が所在している。この荻野丘陵は

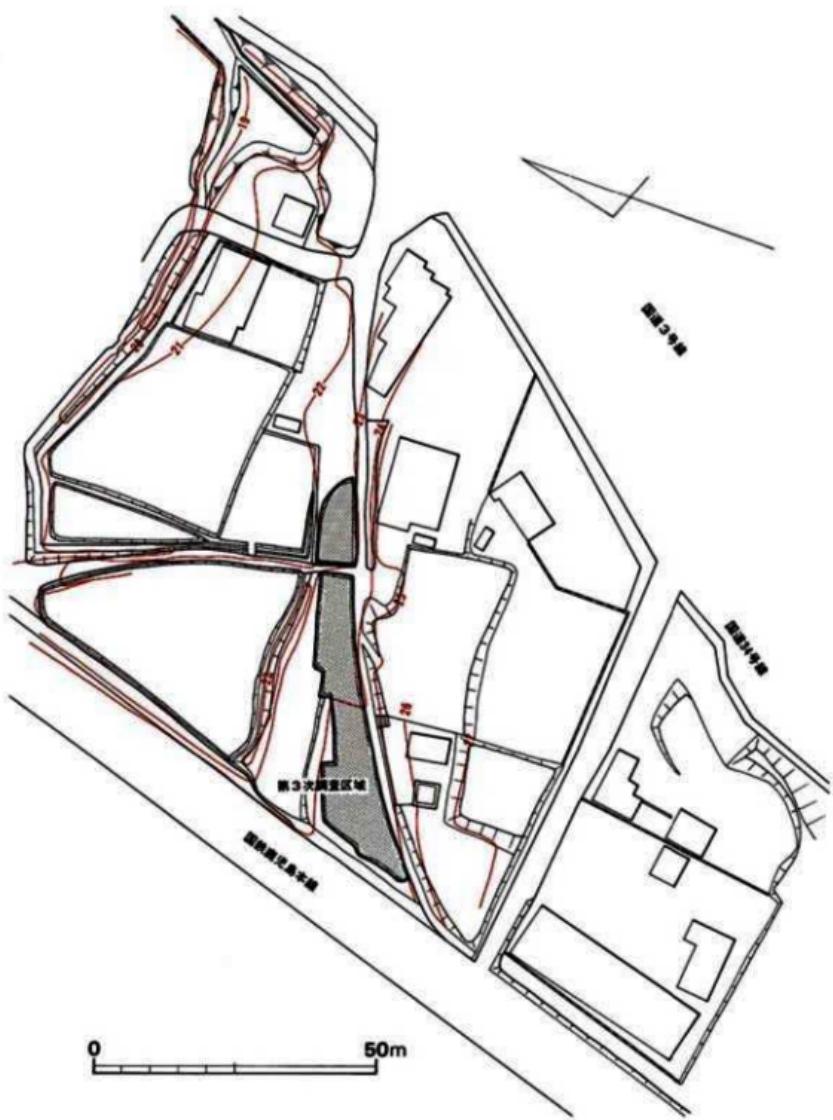
柚比遺跡群とその周辺地域のなかで最も重要な位置を占める地区であろう。それらの墳墓を形成した集団の住居地は丘陵縁辺部の微傾斜地・扇状地と推定される。例えば加藤田遺跡・畠ヶ田遺跡等である。神辺扇状地にも大規模な聚落の存在が推定される。丘陵頂上部の屋根線に墳墓を形成し、その下縁部に居住したと考えられる。

本川原遺跡の北方向の約500mには長ノ原遺跡がある。ここからは弥生時代中期のV字溝や夥しい土器・石器が出土したが、併せて後期中葉から後半にかけての土器も出土している。本遺跡との連続性の検討が問題となる。長ノ原から南に延びている低位段丘上には、株宣隈遺跡・立田石遺跡・幡崎遺跡等の弥生から古墳時代にかけての聚落遺跡が展開している。南西川遺跡・立田石遺跡には腰斎墓・土塚墓群が確認されている。南方約1kmには谷を隔てて姫方遺跡がある。ここにも弥生時代から古墳時代にかけての土器片が密度高く散布している。

以上が本川原遺跡周辺の歴史的環境である。（文責 麻瀬）

文 獻

- ① 中山平次郎「銅鏡・銅刺並びに石劍発見地の遺物」『考古学雑誌8-8』 1918
- ② 島田貞彦「日本青銅利器集成」『京都帝国大学文学部考古学研究報告7』 1925
- ③ 「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告1」佐賀県教育委員会 1928
- ④ 松尾耕作「東肥前の先史遺跡」 1935
- ⑤ 松尾耕作「郷土田代を語る」 1939
- ⑥ 「佐賀県下の文化財」 佐賀県教育委員会 1956
- ⑦ 松尾耕作「佐賀県考古大観」 1957
- ⑧ 「平原古墳」『気象クラブ研究年報・基山中学科学部報告書12』 1957
- ⑨ 松尾耕作「原始時代の鳥栖」『薄尾古墳群について』『鳥栖史談2』鳥栖史談会 1958
- ⑩ 小田富士雄「佐賀県田代発見の石劍と土器」『九州考古学7・8』 1959
- ⑪ 木下之治「佐賀県に於ける埋藏文化財発掘発見の覚書」『郷土研究9』 1959
- ⑫ 「佐賀県の文化財」 佐賀県教育委員会 1961
- ⑬ 銚山猛他「九州出土古代米一覧表」『九州考古学15』 1962
- ⑭ 木下之治他「東十郎古墳群」『佐賀県文化財調査報告13』佐賀県教育委員会 1966
- ⑮ 中尾佐助他「佐賀県梅坂遺跡出土古代米について」『九州考古学36・37』 1969
- ⑯ 木下之治「古代国家の形成」『鳥栖市史』 鳥栖市 1973
- ⑰ 木下之治「鳥栖市山浦古墳群」『佐賀県文化財調査報告21』 佐賀県教育委員会 1973
- ⑱ 木下 巧「田代天満宮東方遺跡」『佐賀県文化財調査報告26』 佐賀県教育委員会 1973
- ⑲ 木下 巧「本川原遺跡」『佐賀県文化財調査報告28』 1974
- ⑳ 松岡 嘉「鳥栖市の前方後円墳」『郷土研究5』 1974
- ㉑ 木下 巧「本川原遺跡第一・第二次調査」『佐賀県文化財調査報告32』 1975
- ㉒ 麻瀬植博「古賀遺跡」『鳥栖市文化財調査報告書2』 1978
- ㉓ 麻瀬植博他「大久保遺跡概報」『鳥栖市文化財調査報告書3』 1978
- ㉔ 志佐深彦「庚申堂塚調査報告書」『佐賀県立博物館調査研究書4』 1978



第3図 本川原遺跡第3次調査周辺地形図 (1/1000)

III. 遺構と遺物

1. 遺構と遺物の概要

第3次の本川原遺跡は、低段丘末端部の標高22~25mの緩傾斜面に位置する。

発掘調査は、予備調査の際に遺構が確認された1,040m²について実施することにし、ユンボーで全面的に表土を剥ぐ作業から開始した。表土層は傾斜地であるために部分的堆積差が見られ、約15~100cmの表土下は茶褐色、及び卵黄色を呈する地山であった。

遺構はその地山に掘り込まれており、大部分が標高24~25mのトレンチ中央部より西方に集中している。発掘の結果、袋状竪穴2、溝2、住居跡3、そして不整形ピット200余の遺構を検出した。時期は縄文時代から歴史時代までの各時期にわたる。

袋状竪穴は1・2号とも袋状を呈し、縄文時代の黒川式土器と思われる深鉢、浅鉢を内蔵する。また同類の土器を持つピットが2号袋状竪穴の北西約1mの位置に存在する。

3軒の住居跡の内、2号・3号住居跡は上部を厚く削平を受け、わずかに方形プランを確認できるのみである。住居跡内の遺物は皆無であるが、1号住居跡は2号溝に、3号住居跡は1号溝にそれぞれ切られた形をなすところから、住居跡は溝よりも時期的に古いと考えられる。2本の溝については、形状は異なるが、流水の痕跡を留めないことや主に歴史時代の土師器細片を出土することなど共通点も見られる。

ピットについては、トレンチ内全体のピット分布から見て、3地域の群に分けることができる。それらのピット群からは、溝内出土の土師器と同類のものを検出した。またこのピット群は何棟かの掘立て柱をもつ建物跡の可能性を窺わせるものであるが確認するまではいかなかった。特に第1ピット群においては密集度が濃いことから、時間的な差をおいて数回の建て直しがあったことを推測できるものである。（文賀 杠）

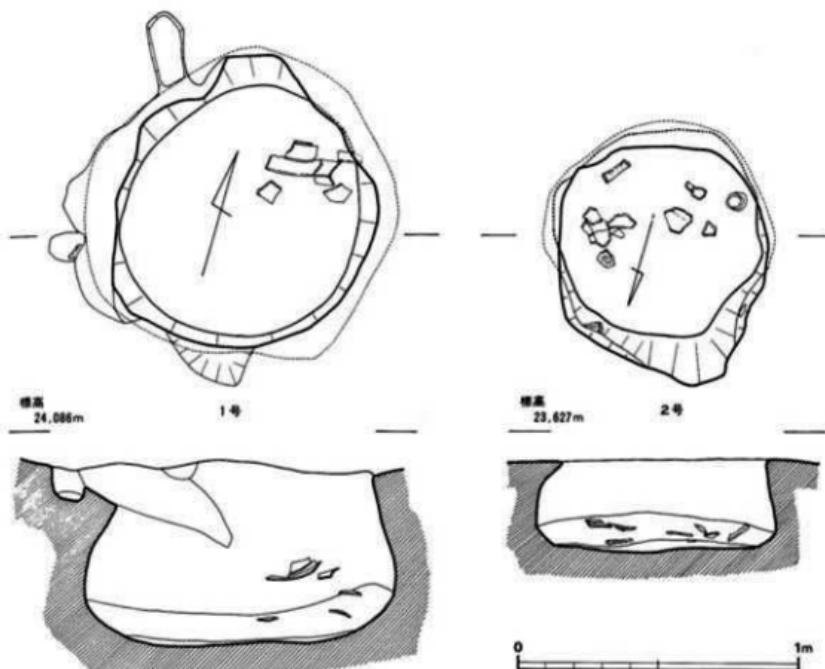
2. 縄文時代

1号袋状竪穴（図版7-1、第4図）

床面形態、径85~90cmを測る楕円形の袋状竪穴で、最大径は床面上約20cmに位置する。壁は最大径部からゆるく内傾しつつ立ち上る。東壁が直線的に対し西壁はやわん曲し上部ですばまる。床面までの深さは現存高で67cmを測る。弥生時代のいわゆる貯蔵穴に比し、やや小形であるが、形態的にはよく類似するものである。遺物は黒川式土器と思われる深鉢、浅鉢、及び石器等が、北東隅からやや浮いた状態で出土した。

〈出土土器〉（図版15-1、第5図1~4）

1は復原口径22cmを測る精製の浅鉢形土器片である。口唇部は丸く取まり外面には1本沈



第4図 袋状竖穴実測図 (1/20)

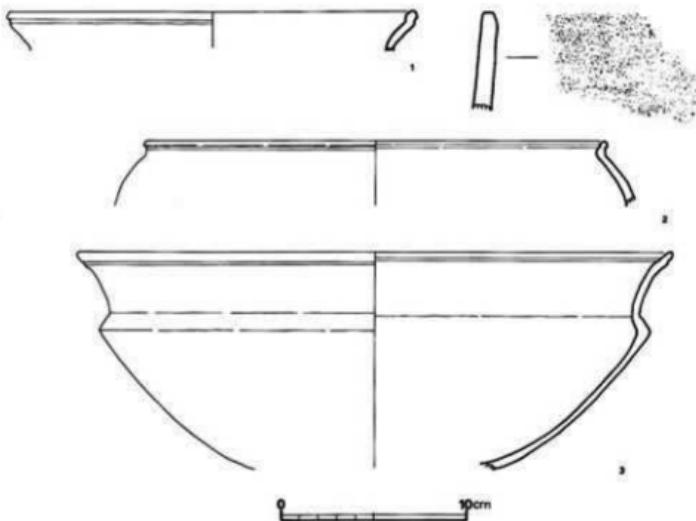
線が引かれ、内面には鈍い沈線状の段を作る。外側に拡がる口縁に粘土を上乗せして端部を作るため、口唇部はやや角度を上向きに変える。器面は内外とも横位の研磨によって仕上げられる。胎土はよく精選され非常に細かい長石粒が認められるのみである。色調は外面が淡褐色、内面は淡黒褐色を呈する。2は復原口径24.8cmを測る精製浅鉢の一種で、内傾する肩部に斜めに粘土を接合しつまみ出したような短い口縁を作っている。接合部の内外には1本の沈線を巡らす。器面は内外とも横位の研磨によって仕上げられる。胎土は非常に細かい長石粒が主でよく精選されている。色調は内面が赤褐色、外面は暗褐色を呈する。3は復原口径32cmを測る精製の浅鉢形土器である。肩部から反転して外方へ伸びる口縁は、端部近くの内外に浅い1本沈線を巡らし、やや尖がり気味に丸まって收まる。口縁の伸びは直線的である。肩部の屈折は急で丸底と思われる底部に連続する。器面調整は外面の肩部以上がていねいな研磨、他は内外ともナデの状態に近い。色調は外面が淡褐色で内面はやや灰色を帯びる。4は口縁端が角張るやや厚手の粗製深鉢である。器面は内外ともナデられ条痕をさして残さない。胎土は長石、石英粒に金雲母を多く含むのが特徴的である。色調は赤褐色を呈する。

2号袋状竪穴（図版7-2、8-1、第4図）

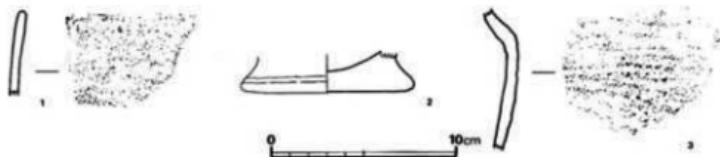
床面形態、径73cmを測る円形の袋状竪穴で、最大径は床面上約12cmに位置する。壁は最大径部から緩く内傾しつつ立ち上る。西壁が直線的であるのに対し、東壁は一度ほぼ垂直に立ち上って上部ですばまる。床面までの深さは現在高で32cmを測る。1号竪穴に比し一巡り小形であるが、この竪穴もやはり弥生時代のいわゆる貯蔵穴と形態的によく類似するものである。遺物は黒川式土器と思われる深鉢、浅鉢等が、南側寄りの床面から10cm内外の位置から出土した。

〈出土土器〉（図版15-1、第6図）

1は口縁端部が角張る薄手の粗製深鉢の破片資料である。器面調整は内面が横位のナデ、外側は口唇部付近が横ナデ、以下は斜位の粗いナデで仕上げられる。条痕をほとんど残さず直線的に伸びる口縁が特徴である。色調は内面が褐色、外側はやや暗い。尚、外側には煤の付着が認められる。2はいわゆる円盤張り付けの底部である。3は粗製深鉢の胸部破片資料で、やや強い肩部を有する。器壁は薄く6mm内外を測るにすぎない。器面調整は肩部が条痕の後横位のナデ、肩部以下には斜位の条痕を顕著に残す。胎土には白っぽい長石粒を多く含む。色調は内面が暗灰色、外側は橙褐色を呈する。



第5図 1号袋状竪穴出土土器実測図 (1/3)

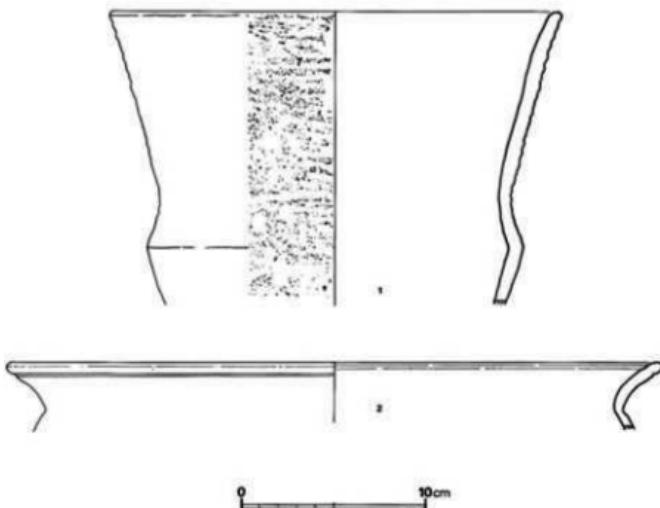


第6図 2号袋状整穴出土土器実測図 (1/3)

その他

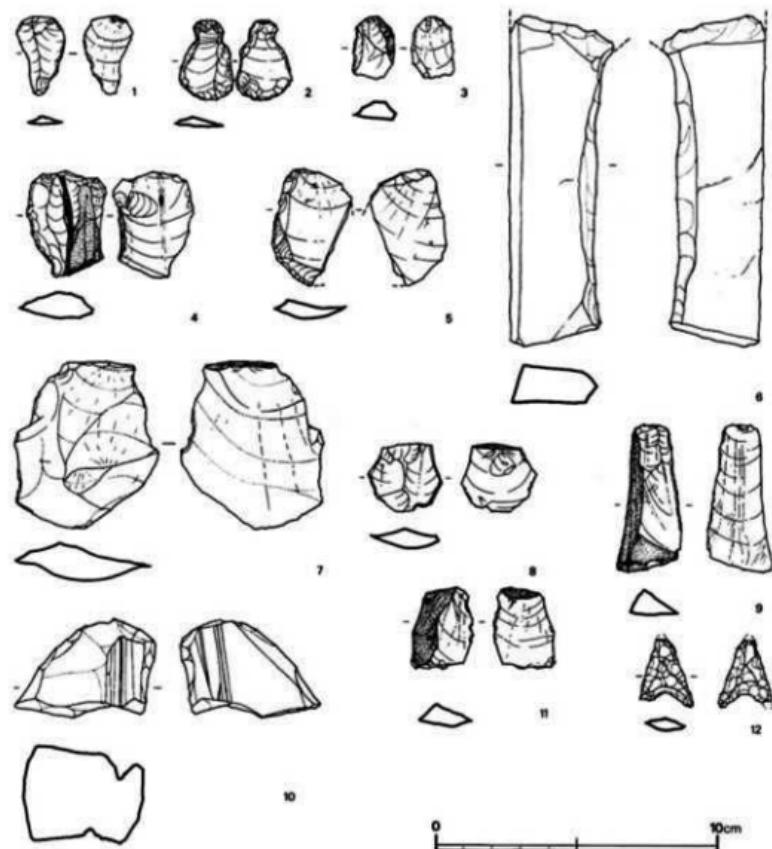
〈ピット1出土土器〉(第7図)

1は端部が角張る平口縁の粗製深鉢で、復原口径24.3cmを測る。緩い肩を作る胸部から反転して伸びるよい口縁が立ち気味に広がる。肩部以下は比較的すばまりが強く、胸部高に比し口縁が長いのが特徴と思われる。肩部の屈曲は甘くやや丸味がかかる傾向を見せ、強い稜線は作らない。器面調整は内面が横位のナデ、外面は口縁部が横位の貝殻条痕の後条痕を残す粗いナデ、肩部以下は貝殻条痕の後ついねいな横位のナデを施し条痕を消している。胎土には粗い石英粒を主に含む。色調は口縁部内面が橙褐色、他は灰褐色を呈する。2は復原口径35.3cmを測る大形の浅鉢形土器である。反転して外方へ伸びる口縁は尖り気味に丸まっ



第7図 ピット1出土土器実測図 (1/3)

て收まる。口唇部内外には1本沈線が巡らされる。器面調整は横位のていねいな研磨によつて仕上げられる。胎土は精選されていて、細かい長石粒を主に酸化鉄粒を加える。色調は赤味がかった淡褐色を呈する。（文責 石橋）



第8図 袋状整穴、その他出土石器実測図 (1/2)

〈袋状堅穴、その他出土石器〉(図版15—2、第8図)

1は1号袋状堅穴、2~8は2号袋状堅穴、9・11は2号溝、10はピット4、12は1号溝から出土した。

1は3.8×1.7cmの縦長剝片を素材とし、打面に自然面を残しているスクレイパーと考えられる。刃部は1側辺に作り出しており、背面から刃済しを行なっている。石材は黒曜石である。

2は側辺・縁辺共に刃部を形成した刀器状石器である。打面に近い2側辺にもノッチを施し刃部を形成している。打面には自然面を残している。石材は良質の黒曜石である。3は縦長剝片の鋭い1側辺を利用したスクレイパーである。背景からの刃済し調整はみられない。主要剝離面に簡単な調整剝離を施している。4は3.8×2.8cmの縦長剝片を素材とする刃器である。打面は折断している。主要剝離面の一部には自然面を残している。5は側辺から縁辺にかけて刃部を形成しているスクレイパーである。一部折損している。2~5の石材は黒曜石である。6は用途不明であるが、一応人為的な剝離・調整が認められるので石器とした。2辺は面とりを施し、1辺には保持しやすいように調整している。他の1辺は折損しているものと判断される。石材は蛇紋岩かと思われる。7はサヌカイト製のスクレイパーである。剝片の鋭利な側辺を利用して刃部とし、削器的な用途としていたと考えられる。一部簡単な調整剝離を施している。8は黒曜石を石材としたスクレイパーであろう。薄い剝片の側辺に刃部を形成し、背面から刃済し剝離を施している。

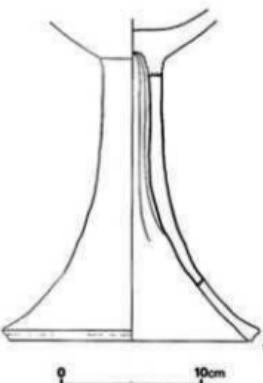
12は1号溝出土の石鏃である。石材はサヌカイトで、両面共に丁寧な調整剝離を施している。先端部と基部片側は欠損している。形態・技法からみて縄文時代のものと思われる。他からの流れ込みであろう。

9・11は黒曜石製の刃器であろう。平行な側辺の一部に刃部を形成している。どちらも主要剝離面に自然面を残している。9は打面を折断している。2点とも石質はあまり良くない。これも12と同様流れ込みのものと考えられる。

10は矢柄研磨器であろうか。良質の砂岩を用いている。1面は砥石として利用しているが、他面は剝離面そのままで深く研ぎ込んでいる。研磨の溝は4条みられる。古墳時代以降の遺物と思われる。

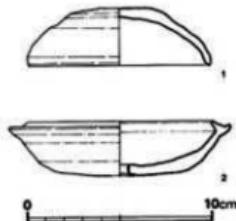
(文責 麻瀬)

3. 弥生時代



第9図 弥生時代土器実測図 (1/4)

弥生式土器（第9図）



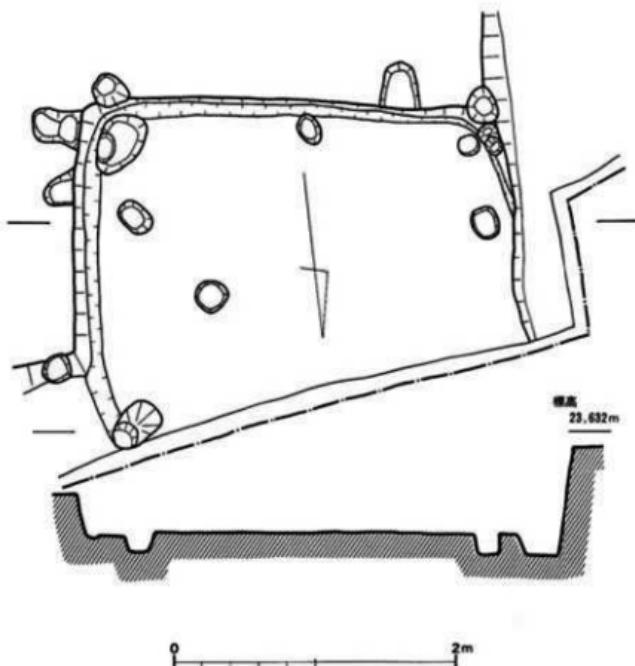
予備調査時出土の高杯脚部資料で、内面には縦方向にしばり痕を残している。内外ともナデ仕上げされる。胎土は精選され細かい長石、石英、酸化鉄粒を含む。色調はやや赤味を帯びた黄褐色。杯部を欠くが形状からして中期後半に位置づけされると思われる。（文貴 石橋）

第10図 古墳時代須恵器実測図（1/3）

4. 古墳時代

須恵器（第10図）

1はピット 2、出土の杯蓋で復原口径11.9cmを測る。天井上部外面は平坦でヘラ切りの後ナデ、天井部以下と内面はロクロによる回転ヨコナデで仕上げる。身受け部は低く、色調青灰色を呈する。須恵のV期に編年され7世紀前半代の時期が考えられるが、IV期の杯身の可



第11図 1号住居跡実測図（1/40）

能性もある。2は1号溝出土の杯身で口径9.8cmを測る。内外ともロクロによる回転横ナデであるが、底部はヘラ切りの後ナデている。また底部にはヘラ記号と、切り残しの粘土が認められる。色調は内面が青灰色、外面は青灰色を呈する。須恵のV期で7世紀前半代の時期が考えられる。（文貴 石橋）

5. 歴史時代

1号住居跡（図版9、第11図）

平面形東西3.1m、南北がやや短くなる比較的小形の方形住居で、壁に沿って幅10cm弱深さ4cm内外の溝を巡らす。壁は現存高27cmを測りシャープに立ち上る。床面は堅くしまっている。焼土は認められず、炉や竈と思われる施設も発見できなかった。2号溝に西壁を切られていて2号溝より古いことが知られる。遺物の出土はなかった。

2号住居跡（図版10、第12図）

東西がやや長くなると思われる一辺3m内外の方形住居である。削平によってほとんど壁を欠いているが、床面との間にわずかに段差が認められる。床面の状態もあまり良くなくやや凸凹がみられた。焼土も認められず炉や竈の発見はできなかった。南東部が発掘区外で全容は知り得ない。遺物の出土はなかった。

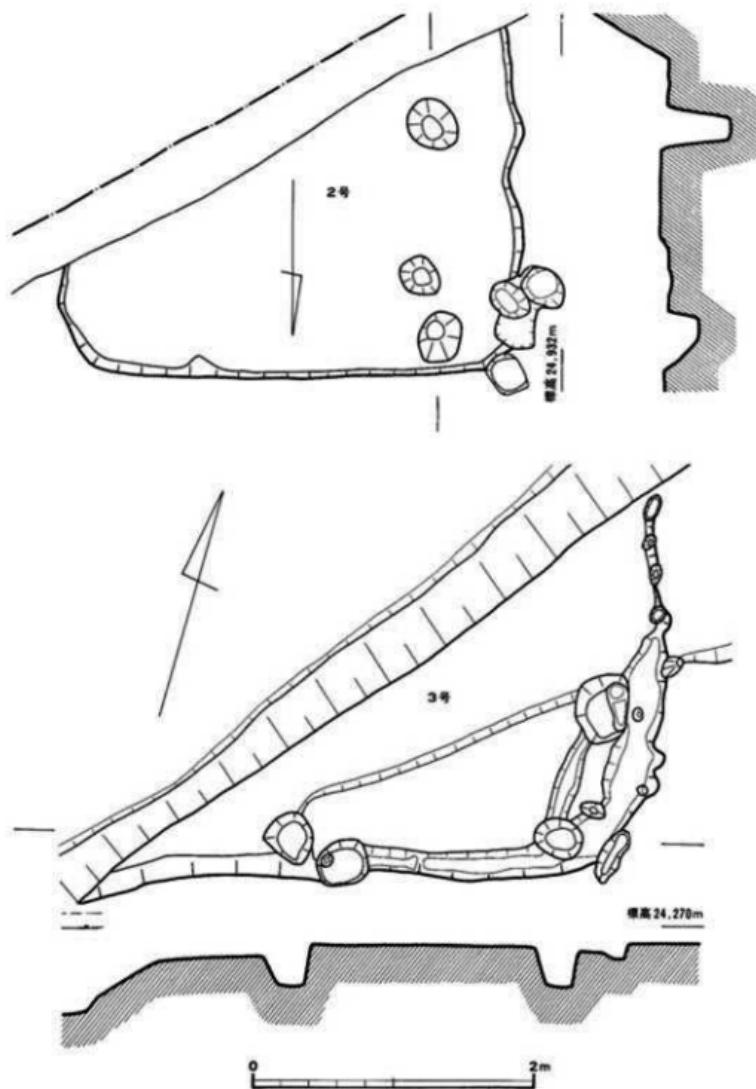
3号住居跡（図版11、第12図）

北西部を1号溝に切られ全容を知り得ないが、南北長3m程度の1、2号同様小形の方形住居と思われる。東西長の確定はできない。尚、壁に沿って幅、深さとも不規則な溝が巡らされる。床面の状態はあまり良くない。焼土は認められず炉や竈の発見もできなかった。遺物の出土はなかった。

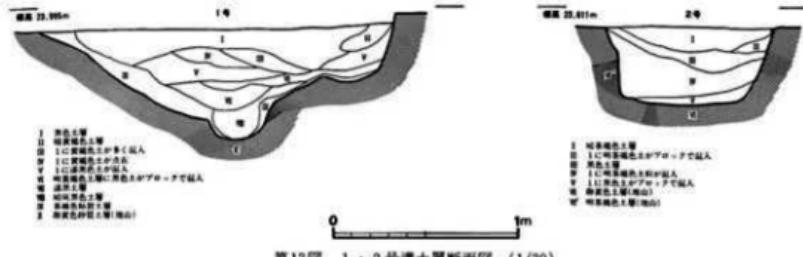
1号溝（図版12、14-1、第13図）

南西-東北方向に走る溝で、東北方向にかけて幅、深さとも増す。地形的には丘陵端、低地に向かって幅、深さが増すことになる。南西部で一度切れる。南西部で幅約70cm、東北部で約1.7mを測る。東北部の土層断面作成位置で、北壁は一度緩い肩を作りながらかに傾斜し、南壁は35cm程急傾斜し、一度わずかに凹む平坦面を作り再び緩く傾斜する。東西壁とも溝底にかけて再度掘り込まれ、幅25cm程度のわずかに凹む平坦な溝底に到る。この1号溝の北側にピットが群をなし集中的に検出された。南側にはピットがほとんどみられず、あたかも溝によって画されたようである。このピット群は何棟分かの建物跡を考えさせたが確認するまでには到らなかった。また南側にはこの溝に切られて3号住居跡が位置する。溝内からの出土遺物はほとんどが細片で、その大半は歴史時代の土師器であった。わずかに1点古墳時代の須恵器が出土したが、歴史時代の溝と考えて大過ないと思われる。

〈1号溝出土土器〉（図版16-1、第14図1-4）



第12図 2・3号住居跡実測図 (1/40)



第13図 1・2号溝土層断面図 (1/30)

1は溝底出土の資料で復原口径11.5cmを測る。直口の口縁で口唇部付近にやや内わんする輪を持つ。内外ともナデ仕上げ。色調は内外とも橙褐色を呈する。2、3はいずれも變形土器の口縁で、それぞれ復原口径15.9cm、16.7cmを測る。3が口唇部にかけて緩やかにすぼまるのに対し、2はやや強く屈接し丸まり気味に取まる。器面調整は、2が内外ともヨコナデ。色調は、2が橙褐色、3は淡褐色を呈する。胎土には2、3とも細かい長石粒を主に含む。4は瓦質の擂鉢で復原口径27.4cmを測る。内面には五条を単位とした幅1.05cmの条溝を縱に施す。間隔は中位部で約3.5cmである。地には条溝に交叉して横位のハケを施している。外表面はナデ仕上げされる。色調は内外ともやや青味がかった灰色を呈する。

2号溝（図版13、14-2、第13図）

ほぼ直角に折れるコーナーを有するU字溝で、コーナー部分を境に東西と南北に走る。東西に走る部分は再度直角に折れ南へ伸びるようである。幅、深さとも一定していて幅は溝上部で約85cm、溝底で約65cm、深さ約43cmを測る。東壁がほぼ垂直に立ち上るのに対し、南壁はやや傾斜を持つ。溝底は平坦である。この溝の東側にはややビットが集中してみられ、また1号住居跡が切られて位置する。出土遺物は1号溝同様歴史時代と思われる土師器の細片であった。

〈2号溝出土土器〉（図版16-1、第14図5）

變形土器の底部で丸味を持った平底をなす。器面調整は内面がヘラケズリ、外表面はハケの後ナデ仕上げである。胎土には長石、石英粒を主に酸化鉄粒を加える。色調は橙褐色。

その他

〈ビット2出土土器〉（図版16-1、第14図8・9）

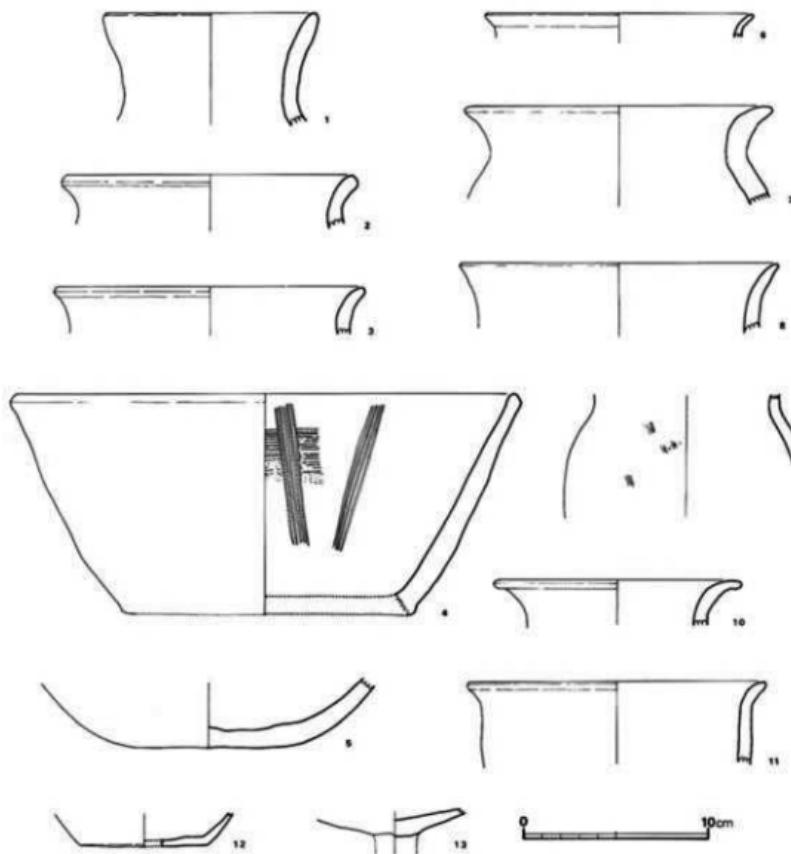
8は變形土器の口縁で復原口径17.2cmを測る。口縁端部にかけてやや外反して尖り気味に取まる。胎土、焼成とも良好で、胎土に酸化鉄粒を含み淡褐色の色調を呈するのが特徴である。9は小形の變形土器の胴部破片で、やや肩を作つてすぼまる。器面調整は外表面が細かい斜位ハケの後ナデ、内面には横位のヘラケズリを施す。胎土、焼成とも精良な土器で色調は赤味がかった橙褐色を呈する。尚、内面には黒い付着物が存する。

〈ビット8出土遺物〉（図版16-1、第14図6）

変形土器の口縁で復原口径14.4cmを測る。器壁は薄く口縁端部近くで短く急に外反する。
胎土は細かい長石粒が主で、色調赤褐色を呈する。

〈ピット11出土土器〉（図版16-1、第14図7）

変形土器の口縁で復原口径16.6cmを測る。口縁内外はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリで仕上げる。赤味がかった橙褐色を呈する焼成堅緻の土器である。胎土に酸化鉄粒を加える。



第14図 溝・包含層出土土器実測図 (1/3)

〈包含層出土土器〉（図版16-1、第14図10~13）

13は小形の高杯片で口縁と脚を欠く。胎土は精選されほとんど砂粒を含まず点々と酸化鉄粒を含むのが特徴である。色調はやや赤味を帯びた淡褐色で焼成も良好。古墳時代の高杯かとも思えたが細片で断定することはできないことからここで扱った。10は變形土器の口縁で復原口径13.4cmを測る。外方へ開き気味の口縁に丸まった口唇部が取まるのが特徴である。胎土には非常に細かい長石粒を含むのみで精選され、焼成も堅緻な土器である。色調は明るい橙褐色を呈する。11は短い返りの口縁の變形土器で復原口径16.1cmを測る。器面調整は口縁内外がヨコナデ、胴部内面は擬位のケズリ、外面はハケの後ナデ仕上げする。色調はくすんだ褐色を呈する。12は平底の杯である。体部は回転ヨコナデで仕上げる。底部はヘラ切りの後ナデで仕上げていると思われる。胎土に酸化鉄粒を多く含む。色調は淡褐色を呈する。

（文責 石橋）

IV. ま　と　め

1. 第3次発掘調査のまとめ

(1) 本遺跡出土の黒川式土器について

今回出土した土器は一般に黒川式土器とされる。黒川式土器は鹿児島県日置郡吹上町黒川洞穴出土の資料を標準として、晩期中頃に比定されている。しかし詳細な土器論を欠くうらみがありその器形上の特徴、成形技法、器種構成、及び分布状況、等がならずしも十分に解明されているとはいがたい。またその所属時期についても晩期初頭に比定される大石式土器や、晩期末に近い山ノ寺式土器とは沈線施文の様相、刻目凸帯文の有無、等細部を異にしかならずしも両型式に直結して連続するとは言いかたい側面を有している。すなわち晩期初頭以降の土器の再検討と細分が要求される所以で、そのなかで黒川式土器も位置づける必要があるかと思われる。以上の状況からここでは黒川式土器を黒川洞穴出土の資料に限定し本遺跡出土土器との若干の比較を試みてまとめとしたい。尚、比較するにあたって本遺跡出土の土器が少ないことから、ある程度器形変化が系譜上たどることの可能な浅鉢形土器に主眼をおいた。

外反する口縁に最大径を有し、反転して胴部が稜線をなし折れる浅鉢が晩期の基本的タイプを構成する。口縁の伸びや外反度、最大径の位置、等バラエティーに富み時系列的な差異も認められる。しかしこの浅鉢が少なくとも御領式以降、基本タイプの一つとして位置し系譜上も器形変化をたどることは疑いないと思われる。その変遷を概観すれば一応細線羽状文を有する三万田式土器は置くとして、その祖形は御領式土器に求めることが可能と思われる。御領式土器のこの種の浅鉢は、胴部から反転する頭部に口縁帶とも言える直口気味の口縁を付し、口縁外面に二本、肩部に一本の凹線を巡らすものを基調とする。一方山形口縁や凹点文を有するものが含まれる。以降の展開をみれば後期からの伝統と思われる山形口縁や凹点文の消失は当然のことながら凹線に変化をきたしていることがわかる。晩期前半から中頃の良好な報告例を欠くが、深鉢を参考にすれば凹線から沈線への変化が想定される。この時期深鉢では沈線の多数化、すなわち凹線段階での定形的特徴のみだけがみられる。凹線や定形的特徴の消失の浅鉢への反映が、どのようなものであるかは資料不足で現在のところ不明と言わざるを得ない。大石式土器と黒川式土器との中間に位置する時期であるが、黒川洞穴資料を見るかぎりおそらく直口する口縁の退化という変遷をたどったと思われる。

以上の大まかな変遷を踏まえて黒川洞穴出土の浅鉢をみれば、口唇部に以下の形態的特徴を認めることができる。1. 口唇部がつまみ上げたように短かく屈折するもの。2. 口唇端部が丸まって收まり内面に沈線状のにぶい段を作るもの。3. 口唇部内面のみが丸くふくれ

内面に沈線もしくは沈線状のにぶい段を作るもの。以上三点が特徴であるが特に1、2の外面には沈線をかならず巡らすようである。これらの特徴を持つ浅鉢が、この時期に普遍的なものであることは他遺跡例でも確認される。ここでは、1のつまみ上げたように屈折するものを御領式期以降の口縁の退化的残存として理解したい。したがって口縁の退化に注目すれば刻目凸帯文の時期にはすでにみられないことからすれば、1により古い形態の残存が認められる。また屈折の縁は2にわずかに認められ、3にはすでに消失してしまっていることから2→3という方向で形態的に新しい傾向をうかがうことができる。

さて本遺跡出土の浅鉢であるが黒川洞穴資料の1、3を欠き2を含んでいるということができる。加えて黒川洞穴ではみない新たな資料を含むことが指摘される。4. 口唇部まで直線的に伸びる口縁の端部内外に一本沈線を巡らすのみのものである。すでに屈折の縁は完全に消失させている。黒川洞穴資料の1~3より更に新しい特徴と言わねばならない。もちろん本遺跡の浅鉢が2、4のみによって構成されると、出土資料が少なく確定できないが、4が多い傾向を示すようである。いずれにしても本遺跡では黒川洞穴資料の、1を欠き新たに4を加えるという差は重要と言わねばならない。現在までのところ、4の浅鉢についての良好な報告例を欠くが、熊本県菊鹿町天ノ岩戸岩陰遺跡に類似資料がみられる。また熊本市新南部遺跡でも出土例があり、その量は決して少なくないようである。ある時期、4の浅鉢が基本的構成要素となる公算は高いと思われる。しかし遺跡で1~3とどう関わって出土していくかについては不明と言わざるを得ない。今後の課題としたい。

以上の観点からすれば本遺跡出土の資料が、黒川洞穴資料とは若干の差を有していることが判明する。より新しい様相を示しているということができるであろうか。しかしいずれにしても資料不足で、浅鉢の口唇部形態のみの検討という弱点はいためない。今後の資料増加を待ち、全体の形態的特徴やセット関係、等の検討によって補正していかなければならないであろう。尚、本遺跡出土の深鉢形土器に器高に比し口縁が長く鋭い肩を作るものがあるが現在までのところ類例に乏しくわずかに箇遺跡に近いものがあるにすぎなかつた。今後の類例增加に期待したい。また本遺跡出土資料に凸帯文土器の祖形的なものを共伴する可能性もあるが、これも今後の課題であろう。（文責 石橋）

（2）調査のまとめ

第3次の発掘調査で明らかにされた本川原遺跡は、縄文時代の袋状竪穴2、7世紀代に推定される住居跡3、歴史時代の溝2、それに掘立柱建物のものと思われるピット群が主体であった。

今回発掘された2基の貯蔵穴は袋状竪穴を呈し、黒川式土器と思われる深体、浅鉢を伴なうことから縄文時代に時期を推定した。佐賀県内の縄文時代貯蔵穴としては西有田町の坂の

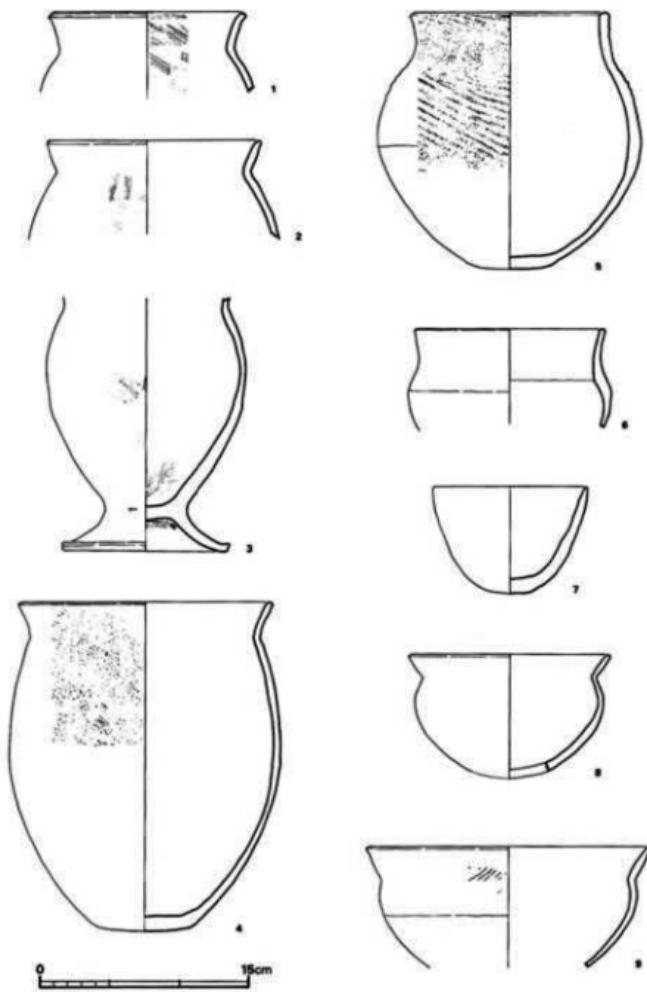
下縄文遺跡（註1）が知られる。しかし、その大部分は断面の基本形が鉢形を呈しており、袋状の竪穴である本川原遺跡の場合とは形態を異にしているといえる。むしろ形態からいえば弥生時代に見られる袋状竪穴の貯蔵穴に近いものである。これらの形態の特色は食料を蓄積保存するという機能上の相違からきていると思われる。袋状竪穴内の環境は、外気の環境変化とあまり関係なく温度、湿度（湿度は一般に高い）とも変化は少なくて、ほぼ一定であるとされる（註2）が、この袋状竪穴の性格を利用した貯蔵方法が規模の違いはあれ縄文時代の本川原遺跡に見られることは注目に値する。しかし縄文時代の袋状竪穴については今後の調査事例の発見をまって検討を加える必要があるようと思える。

2本の溝については形状を比較した場合に相当の違いが見られる。1号溝は南西から東北に走り、側面に段をもちV字の形状を呈する。そして東北方向にかけて幅、深さとも増す。しかし溝底から判断し溝自体、東北方向に傾斜していたことは推測できるが、南西部分に後世相当の削平を受けた形跡があり、幅・深さとともに同じ形状をもっていた可能性もある。溝内の土層堆積は黒色土をベースとして9層に分割でき、部分的に壁面地山の崩壊土が混入している。流水の痕跡は見られない。時期については溝内から出土した土師器片から奈良から平安時代のものであろうと推定される。溝自身の性格については判断の資料に欠けるが、遺構配置から見て北方の掘立て柱建物と見られるピット群と間を画する役割を果たしたとも考えられる。

2号溝については、遺構検出の際、形状から見て第1次調査で出土した方形周溝墓の周溝かと思われたが完掘の結果、単なる溝であることが確認された。1号溝よりやや小形で、底部が平坦なU字形をなす。中央部がほぼ直角にわん曲し、同じ幅、深さをもしながらトレーニング外に連続する。溝内の土層堆積は茶褐色土をベースとして5層に分割できるが黒色土の混入が多い。土質としては1号溝とほぼ同質である。また流水の痕跡もみられないことや、出土土師器片から判断して、1号溝と多少の時期の差は存在したにせよ、ほぼ同時代のものであり、性格的にも同じでなかったのかと推測できる。

住居跡については出土遺物が皆無で時代を確定する資料に欠けるが、1・2・3号住居跡とも1辺が約3m前後の方形プランであり、これは第2次調査で出土した7世紀代の須恵器を伴なう7号住居跡と類似している。また1号住居跡が2号溝に、3号住居跡が1号溝と歴史時代の溝に切られていることから、漢とした判断であるが7世紀頃の住居跡でないかと考えられる。

ピット群については、すべてが柱穴とは考えられず、後世の耕作穴、または草木根跡も存在すると思われる。しかし何棟かの掘立て柱の建物跡の可能性を窺わせるものもあるが確認するまでにはいかなかった。ピットの時期としては土師器片の出土から溝と同時期のものであったと推定できる。



第15図 第2次調査6号住居跡出土土器実測図 (1/4)

第3次本川原遺跡発掘調査は遺構・遺物とも限られた資料であったが、縄文時代の貯蔵穴から歴史時代の住居跡までの幅広い生活遺構が中心であった。特に縄文時代の袋状貯蔵穴の充実については、他の遺跡、及び他の資料等の検討と平行してすすめるべき今後の課題といえる。(文責 杉)

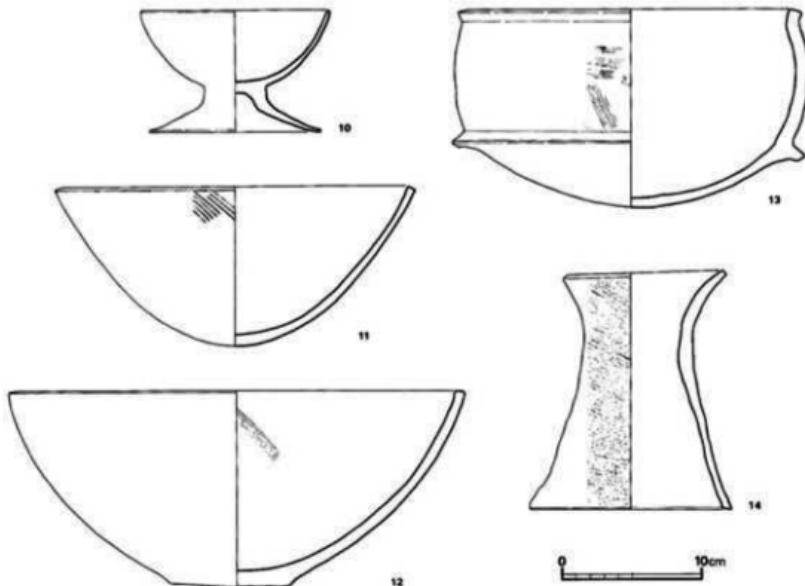
註 (1) 岩元静雄、森醇一朗「坂の下縄文遺跡」『佐賀県文化財調査報告書第19集』佐賀県教育委員会 1971

(2) 井上裕弘「門田遺跡・辻田地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集 下巻 福岡県教育委員会 1978

2. 本川原遺跡全体のまとめ

(1) 第1・第2次調査出土土器について(図版19、20、21-1、第15~20図)

本川原遺跡にはすでに二度に亘り調査が加えられ、その後遺跡も当初とは大きく景観を変えている。したがってここでは遺跡の総合的所見を得、その復原を試みることも必要かと思



第16図 第2次調査6号住居跡出土土器実測図 (1/4)

い1・2次調査分の土器についても再録することにした。再録するにあたって、木下巧氏には心よく了承いただいた。感謝する次第である。尚、ここではすでに報告済みの土器については省略し、未報告分についてのみ説明を加えたい。

〈6号住居跡出土土器〉(第15~16図)

1はやや立ち気味に外反する「く」字状口縁の裏片で、内面は斜位ハケ、外面の口縁部がヨコナデ、胴部には粗い右下りのタタキが施される。口縁端はつまみ出された様にヨコナデされ、短く外側に屈曲する。復原口径14.2cmを測る。2はやや内わん気味に直口する「く」字状口縁の裏片で、口唇部は1同様つまみ出されたように外側に屈曲する。器面調整は内面が細かいハケナデ、外面は細かい斜位ハケ、口縁部は内外ともヨコナデ仕上げされる。復原口径15.4cm。色調は淡褐色。6は直口する口縁に棱線を作る胴部の小形壺である。器面調整は棱線以上の内外が横研磨、内面はナデ仕上げされる。第16図10と色調を同じくするやや赤味を帯びた橙褐色の精製土器である。

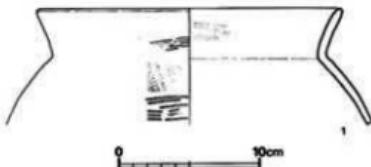
復原口径13.5cm。9は「く」字形口縁の体で胴部に棱線を作る。器面調整は内面が研磨、外面の棱線以上が左下りタタキの後ナデ、以下にはケズリを施す。復原口径20.1cm。

〈8号住居跡出土土器〉(第17図)

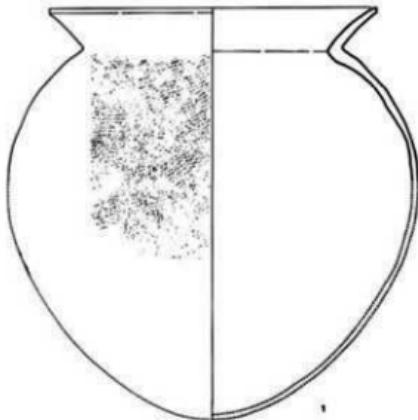
立ち気味に外反する「く」字形口縁の裏で、6号住居跡出土土器と同様端部がつまみ出されたようなクセを持つ。胴部内面はナデ、外面は口縁が細かい横タタキの後斜位ハケ、以下は横位のタタキで仕上げる。肩部のタタキが斜位ハケで完全にナデ消されることや、口縁部のタタキ(長さ1.6cm、幅2mm)の細かいことが注意される。復原口径21.7cm。色調は淡褐色。

〈1号方形周溝墓出土土器〉(第19図)

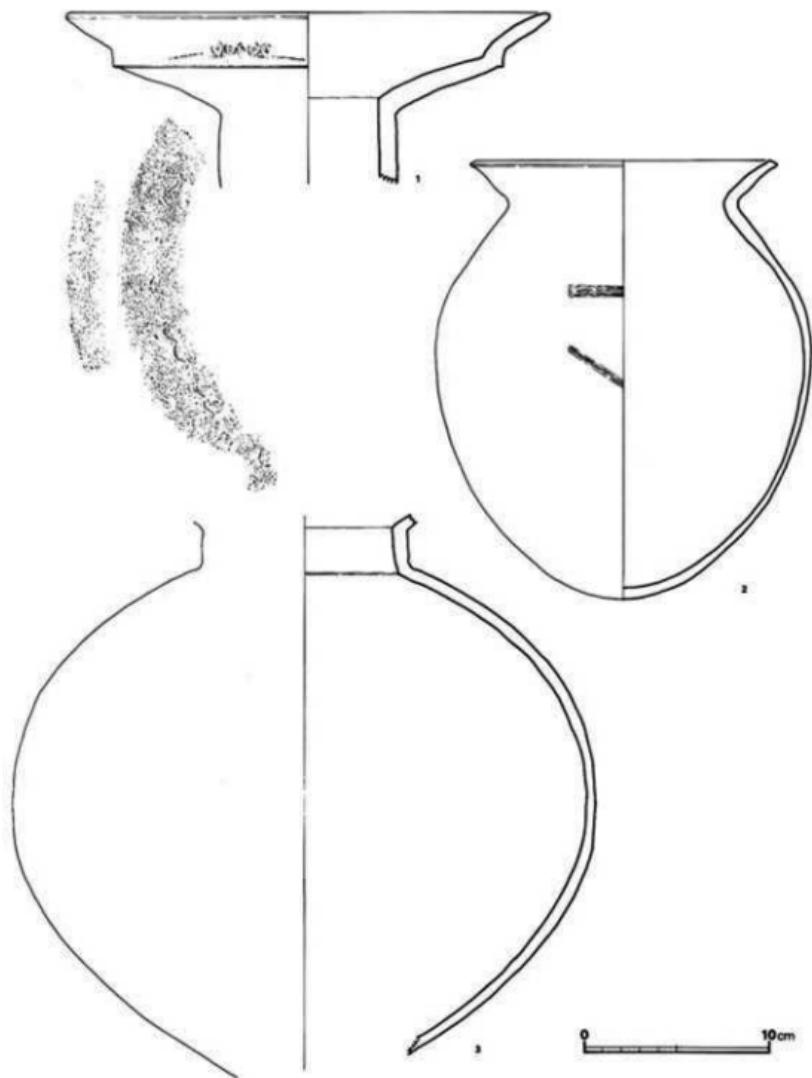
3は一般に茶臼山タイプと言われる複合口縁の壺で、肩部と底部



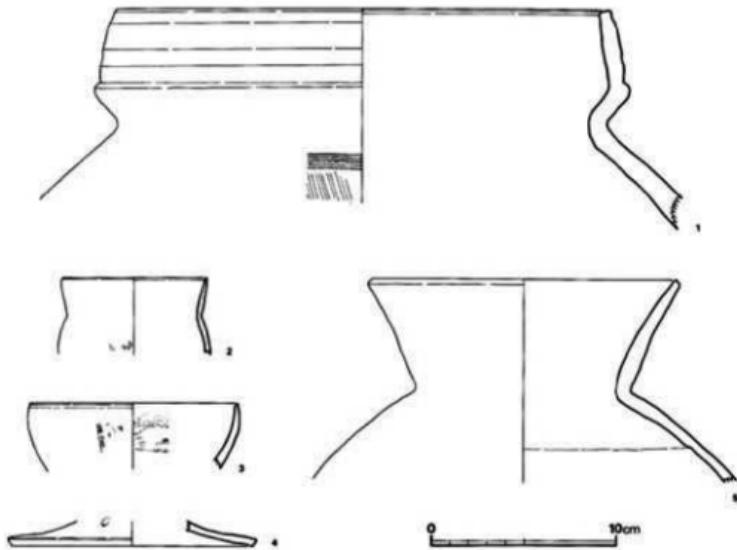
第17図 第2次調査8号住居跡出土土器実測図(1/4)



第18図 第2次調査5号住居跡出土土器実測図(1/3)



第19図 第2次調査1号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)



第20図 第2次調査B-5-6区U字溝、包含層出土土器実測図 (1/3)

に焼成後の穿孔が認められる。器面調整は内面がケズリの後ハケナデで、ケズリ痕は頭部付近に残すのみである。胴部外面は斜位の研磨で仕上げられる。最大径を胴中位に有する壺で肩はさして張らない。色調は赤味がかった橙褐色を呈し特徴的である。

〈B-5、6区U字溝出土土器〉 (第20図、1)

口縁が内傾する複合口縁の壺で、口唇端部はやや内傾し内外はヨコナデによって凹む。複合部には粘土紐が貼り付けられ凸帯状をなす。器面調整は内面が頭部近くまでのケズリで、胴部破片資料からすればケズリは全面に及んでいたと思われる。頭部及び口縁部の内外はヨコナデ、胴部は肩部付近に横ハケ、以下は斜位ハケで仕上げる。長球形で丸底の器形をなす在地系の壺と思われる。復原口径26.7cm。

〈包含層出土土器〉 (第20図、2～5)

2は球形の胴部に直口気味の短い口縁が付く小形丸底壺である。器面調整は外面の体部上半以上が研磨、以下にはわずかにハケ痕を残す。内面は体部がナデ、口縁はヨコナデ仕上げされる。胎土は精選され焼成も良い精良な作りの土器である。色調は淡褐色。3は杯もしくは小形の高杯と思われる。器面調整は内面が横位のハケの後研磨、外面は口縁部付近がヨコナデ、以下は非常に細かいハケ仕上げである。4は小形の高杯の脚部破片で円形の透かしが認

められる。器面調整は内外とも細かいハケの後研磨仕上げされる。色調は灰色を呈する。5は口縁が直口気味に長く伸びる単口縁の甕で、口唇部内面はヨコナデされわずかに凹む。器面調整は口縁部内外がヨコナデ、胴部は内面の口縁近くがハケで以下は横位のケズリ、外面は頸部付近をヨコナデする以外はハケを施す。

色調は淡褐色。

〈小結〉

以上が未報告分でいずれも1・2次調査で指摘された6号住居跡や方形周溝墓出土資料の時期におおよそ帰属することは疑いない。すでに前者は本川原I式、後者は本川原II式として、それぞれ弥生時代終末～古墳時代初頭と古墳時代前期の位置が与えられている。ところで近年この時期の研究の進展は著しく、福岡県では古式土師器の編年へ向けた作業が平野単位で細かく進められている。本川原遺跡の第2次調査報告以来すでに丸4年が経過した。その間の研究進展は現在我々に若干の新知見を加えることを可能にした。以下それぞれ気付いた点について記しまとめとしたい。

6号住居跡出土土器を新たに弥生終末期に限定する見解が出されている。ここで個々の土器について検討を加える余裕はないが、我々も現状では終末期に限定して大過ないと考えている。壺、高杯を欠く弱みはあるが、明確に土師器と思われる器形や成形技法を欠いている。ただ注意されるのは第15図5の右下り螺旋状タタキと、4の胴部上半の細かい螺旋状タタキに下半をナデるという成形であろう。詳細については今後に託したい。

ところで本資料は姫方原方形周溝墓出土土器との比較で終末期に限定されている。斐形土器のヘラケズリの有無が主要な根拠とされ、姫方原資料に口縁部が内わんし内面ヘラケズリをおこなう甕を含むことから土師器として分離し本資料を終末期に比定している。そのこと自体問題はないが、比較以前の問題として姫方原方形周溝墓に疑問を呈するものである。本遺跡とは直接関係ないが三養基郡ひいては佐賀平野東部における弥生式土器～土師器への変遷に関わる問題であるので疑問点を提示し大方の御教示を得たい。

1. 遺構の性格であるが方形周溝墓と確定するには弱い側面を有し、集落に伴う溝の可能性を捨てがたいということ。2. 遺構の性格にも関わるが出土土器を一時期の所産として考えていいかどうかということ。以上2点である。以下若干検討を加えてみたい。1については、コーナーの一角しか掘られてなく溝の全容がつかめずしかも主体部の確認がないこと、溝の形状が不規則で、東溝は弧を描き南下するにしたがって幅、深さとも増してくること、遺物の出土状態が、あたかも廃棄されたようでその量も多く、器種も多種に及びあたかも集落に伴う溝の状態に類似していること、等の理由による。2については土器の様相が形態上から明らかに二時期に分離される可能性が考えられることである。器台、脚付きの甕と鉢、高杯の脚部と弥生終末期的特徴を備えるのに対し、土師器の一群は布留式の古い時期に相当

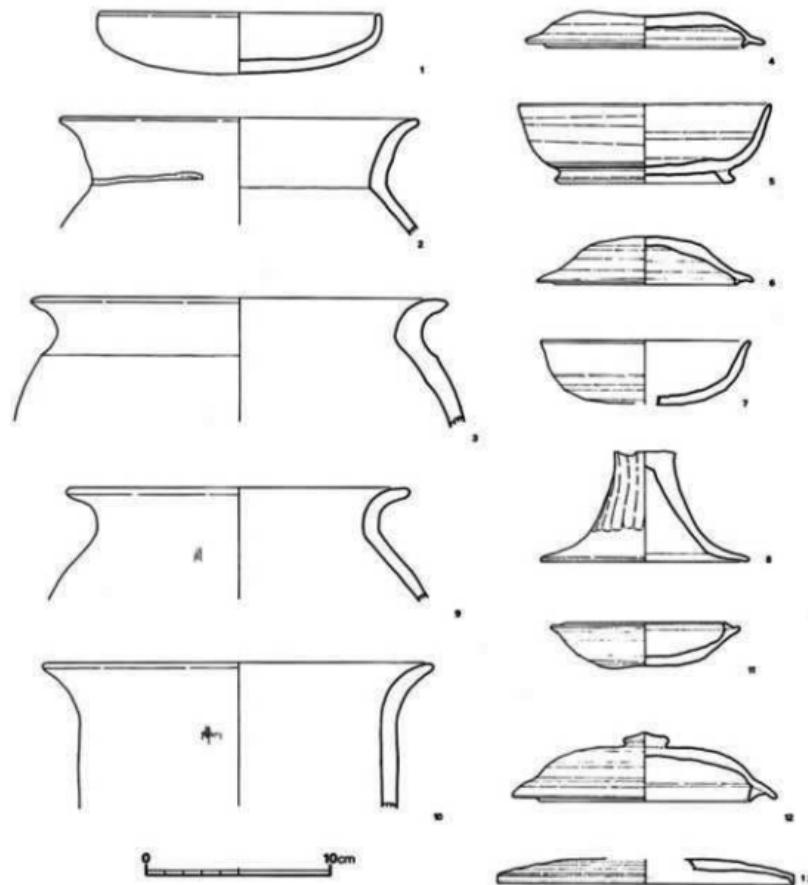
する特徴を備えている。この種の土師器と弥生終末期との間に福岡平野では2時期の土師器の変遷を考えられている。もし姫方原資料を一時期の所産とすれば、佐賀平野東部地域では布留式の様相を示す時期まで、全器種に亘って弥生終末期的様相が残存することになるがいかがなものであろうか。福岡平野での変遷と差がありすぎるくらいがあり、またやや新しい様相を示すがほぼ近い時期と思われる戊方形周溝墓資料には、一齊弥生終末期的様相を含まないことからすれば異常と言わざるを得ない。もし姫方原方形周溝墓が集落に伴う溝であるならば数時に亘っての廃棄ということも考えられ、時期差を有するものが含まれても説明はつく。再検討が要請される。

5号住居跡、1号方形周溝墓出土土器にはきわめて注目すべき資料が含まれている。まず5号住居跡出土土器であるが、庄内式系統の甕である。非常に細かいタタキが最初に横に施され、後左下りのタタキを螺旋状に巡らす。胴下半はナデられる。内面のケズリは頭部まで及ぶが、後頸部付近はナデされる。内面頸部の屈折は強く残り、口唇部にはわずかにつまみ上げ状の縁を残す。色調は赤味がかった橙褐色を呈する。最近庄内式の甕が九州でも知られるようになり、その良好な資料が福岡県春日市柏田遺跡で出土している。移入品とも思えるもので非常に細かい螺旋状タタキが底部付近まで及ぶこと、斜位のヘラケズリが内面頸部まで及び強い稜線を作ること、口唇部はつまみ上げられ色調はくすんだ灰褐色を呈すること、等が特徴である。5号住居跡出土土器とはタタキの大きさや状態、ヘラケズリの方向や位置内面頸部の屈折具合、口唇部の特徴、色調、等をやや異なるが器形は基本的に同一である。以上の差異は庄内式甕の定形的特徴の変化と理解され、5号住居跡資料に新しい様相を窺うことができる。また移入品とも思える柏田遺跡資料との色調の差は大きく、本遺跡資料は庄内式甕を基本にこちらで作られたものと思われる。次に1号方形周溝墓出土土器であるが、明らかに畿内系の移入品と思われる壺（第19図、1）がある。口縁部内面に7条2段、外面に7条1段の櫛目波状文を巡らしている。また口縁の屈折には5連単位の円形浮文に竹管を施したものを4個付している。色調は柏田遺跡出土の庄内式甕と同一のくすんだ灰褐色で、他の土器と異なる。共伴の甕（第19図2）は、やや肩の張った長胴の器形で内面はヘラケズリされる。内わん気味になる口縁の端部内外がわずかに肥厚し、ケズリが内面頸部まで及ばず稜線を作らないのが特徴である。この甕は柏田遺跡の変遷でみた場合、そのII～III期的な特徴を備えていておおよそ布留式の古いものに対応させ得る。

したがって以上の土師器は5号住居跡資料が庄内系であるのに対し、1号方形周溝墓資料は布留式の古手に通じるものと理解され、形態変化上一応5号住居跡資料→1号方形周溝墓資料という変遷が考えられる。このことは5号住居を含む住居跡群の一つが1号方形周溝墓から切られていることからも類推させる。しかし本遺跡での資料も少ないとや、上述二者がきわめて近い時間関係にあり遺跡では共伴する可能性もあることから詳細は今後の資料増

加を待って再度検討を加えたいと思う。

包含層出土の土器は第20図1、5以外いずれも上述の土師器の時期に帰属するとみて大過なかろう。第20図1、5の資料は新しい様相を示していくて布留式の典型期まで下り得る可能性がある。しかしこの土器についても詳細は不明で今後に待たなければならない。以上概観してきたが資料が少なく、特に在地系の土器の変遷が追えなかったのが弱点である。今後に



第21図 第2次調査古墳・歴史時代出土土器実測図 (1/3)

託したいと思う。（文責 石崎）

参考文献

- ①「本川原遺跡第一回調査」『佐賀県文化財調査報告書第26集』佐賀県教育委員会 1974年
- ②「本川原遺跡第二次調査」『佐賀県文化財調査報告書第32集』佐賀県教育委員会 1975年
- ③「飯方原遺跡」『佐賀県文化財調査報告書第33集』佐賀県教育委員会 1976年
- ④井上裕弘「柏田遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』4 1977年
- ⑤武末純一「佐賀県久蘇遺跡出土の古式土器」『古文化論叢』第3集 1976年

〈古墳時代以降の土師器・須恵器〉（図版21-1・第21図）

ここで取り扱った資料は全て第2次調査出土のものである。一部紹介したものもあるが、本川原遺跡全体の様相を把握するため再度紹介してみる事とする。

1～6は土壤5から出土した。1～3は土師器・4～6は須恵器である。1は口径15.3cm・器高3.3cmを測る浅い杯である。胎土・焼成共に良好で丁寧な作りである。色調は淡赤褐色を呈している。2は口径19.5cm・3は口径22.5cmを測る甌である。色調はどちらも赤褐色を呈している。胎土・焼成共に良好であるが、3はやや軟質である。4は須恵器杯蓋である。口径12.9cm・器高2.3cmを測る。胎土に砂粒を多く含み質はあまり良くない。磨印がみられる。5は口径13.7cm・器高4.3cm・高台径9.8cmを測る杯身である。胎土は良好であるが、焼成はややあまい感じである。6は焼成の非常に悪い杯蓋である。口径11.7cm・器高2.6cmを測る。

7・8は土壤6から出土している。7は須恵器の杯身で口径11.3cm・器高3.4cmである。8は土師器高杯の脚で、脚径11.3cmを測る。胎土は良く精製されており良好だが、焼成は軟質である。

9・10は7号住居跡からの出土土師器である。共に變形土器であると判断される。胎土に砂粒・金雲母を多く含んでいる。9は口径18.5cm・10は口径21.2cmである。

11～13は包含層出土の須恵器である。11は口径10.2cm・器高2.4cmを測る杯身である。胎土・焼成共にあまり良くない。12は口径14.3cm・器高3.7cmを測る杯蓋である。宝珠形のつまみをもつ大形のものである。胎土・焼成共に良好で、器表面には自然釉が噴き出ている。13も杯蓋である。実測復原では口径16.1cm・器高1.4cmとなる。口縁先端部は直角に折り曲げている。

〈小結〉

以上紹介した資料の時期について、須恵器を中心に判断してみたい。北九州地方の須恵器調査例から判断すると、4～6はいわゆる須恵器編年VIa期に該当し、7世紀中頃と比定される。従って土壤5については7世紀代の所産と考えられる。7の杯身は断定はできないが、須恵器編年V期かあるいはVIa期のやや先行するタイプと考えられる。実年代は7世紀前半代から中頃にかけての時期と比定される。従って土壤6は土壤5にやや先行するものと考えられる。7号住居跡出土の9・10の土師器については、時期判断の明確な須恵器が共伴せず詳

細は不明であるが、土壙5の土師器と比較してそれより古くなるとは考えられない。従って7世紀中頃以降の住居跡であるとしておく。11は須恵器編年Ⅳ期で6世紀末、12はVIa期、13はVIb期の7世紀後半に該当すると判断される。従って第2次調査区域の包含層はおおむね7世紀代のものと思われる。（文責 藤原）

（2）第1～3次調査のまとめ

前項において第1・2次調査出土土器と遺構について、現段階までの研究成果から再検討してみた。ここではその上にたって第1～3次調査区域の成果とでき得る限り本川原遺跡全体の様相の把握に努めてみたい。

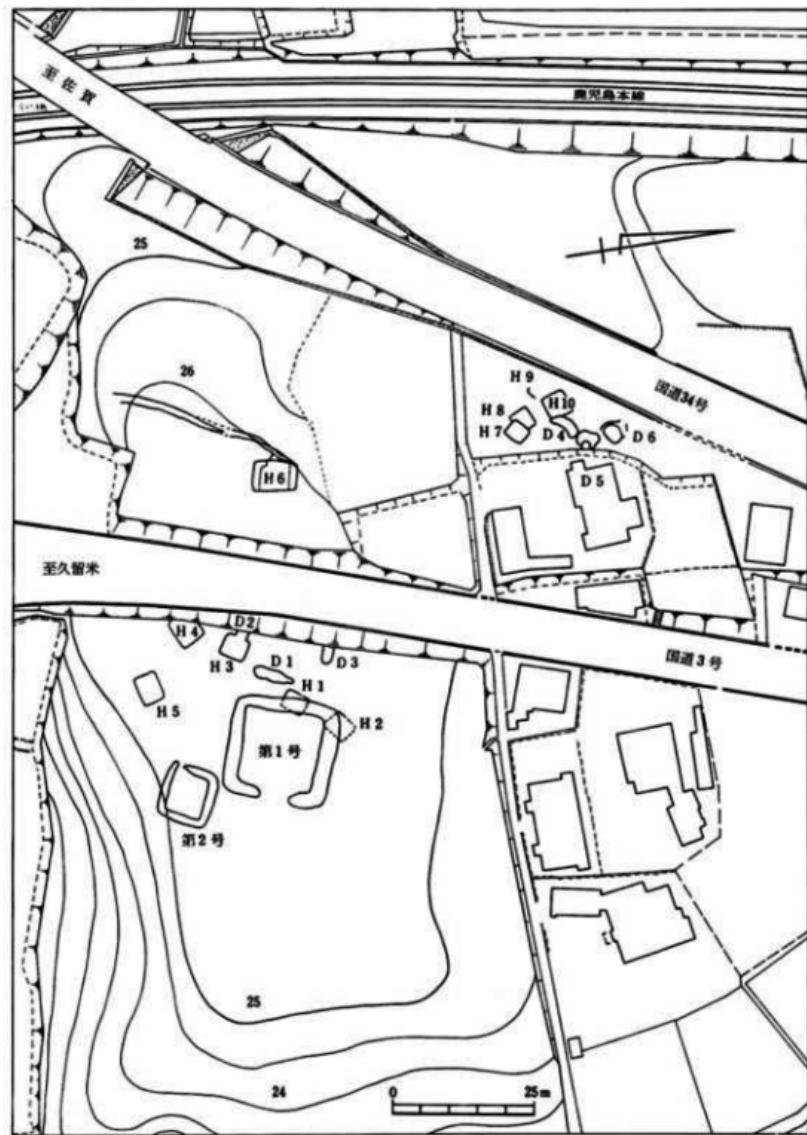
まず、第1・2次調査分を時期毎に追って記述してみる。第2次調査区域出土の6号・8号住居跡は弥生時代終末期の所産であると現段階では判断される。住居跡の大きさ・平面形態や6号住はベッド状遺構をもち、8号住はもたないという差異はあるが、出土土器から判断してほぼ同時期のものと考えて差し支えないと思う。第2次調査報告書では、これらの土器群を「本川原I式土器」と呼称されている。福岡平野例であるが、春日市柏田遺跡の弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての編年「柏田I期」とほぼ同じ様相を示している。

次は1号・4号・5号住居跡出土の土器群が1つのグループとして掲げられる。第2次調査報告書では、方形周溝墓出土の土器群を「本川原II式土器」とされているが、現段階ではそれに先行するものとしてこれらの土器群が考えられている。1号住が1号方形周溝墓から切られているのも、そうであるならば首肯する。従って、本稿では1号・4号・5号住の土器群を「本川原II期」と称する事にしたい。6号・8号住のものについては「本川原I期」とし、方形周溝墓出土の土器群を「本川原III期」と称したい。先述の柏田遺跡では「柏田II期」と「本川原II期」とがほぼ同じ傾向を示している。

その次に、方形周溝墓出土の「本川原III期」とした土器群がある。この土器群は前項で述べたように「庄内式」土器とも対応させるべき二重口縁壺と「布留式」系統の土器を含んでいる。やはりこの事からも「本川原II期」とした土器群よりもやや後行する土器群と言える。しかし、その時間差は殆どないか、ほぼ連続するものと考えられる。従って、方形周溝墓は1～5号住居跡群の廃棄後（直後の可能性が大きいが）に方形周溝墓を形成している。

次はかなり長い時間差があるが、土壙6の出土土器がある。これは7世紀前半から中頃にかけてのものであると考えられる。それに連続するものとして土壙5の土器群がある。土師器については明確にできないが、須恵器では明らかに須恵器編年VIa期である。従って、土壙5は7世紀中頃の所産として考えられる。7号住居跡出土の土師器については、先述のように7世紀中頃以降と考えなければならない。第2次調査区域出土の包含層の須恵器は6世紀末から7世紀後半までで、おおむね7世紀代と言える。

以上が第1・2次調査分の遺構と遺物についてであるが、それに第3次調査分を加えて検



(本川原遺跡－第2次調査－報告書から転載)

第22図 本川原第1・2次調査地形測量図 (1/1000)

討してみたい。出土土器からみると、溝や柱穴群からは奈良から平安時代にかけての土器群が出土している。擂鉢形瓦質土器については時期は明確にできないが、それ以外の土器の底部を観察してみると切り離し手法はヘラ切り痕が認められる。その事から、その下限は10世紀代を下らないかとも考えられる。実測可能ではなかった須恵器類についても矛盾しないと判断している。さてそうすると、1号溝や2号溝に切られている1～3号住居跡であるが、大きさ・平面形態や方向からみると3軒とも同時期のものと判断される。その年代については、1～2号溝から切られている事から考えると下限は10世紀代となる。上限については、住居跡付近の包含層や流れ込みであると思われる須恵器が6世紀末から7世紀代にかけてがあるので、この時期が該当させられるのではないか。また、住居跡の大きさ・平面形態では、第2次調査の7号住と近似している。立地も同じ北斜面である。第2次調査7号住は7世紀代と判断されるので、第3次調査出土住居跡群についてもおおむね7世紀代と判断して矛盾はないと思われる。

さて、時代は逆になってしまったが、縄文時代晩期黒川式土器とそれを出土した袋状竪穴について、気付いた点について述べてみたい。基本的な事実に関しては「第3次調査のまとめ」で述べてあるので、ここでは重複を避けてその他の問題に言及してみたい。

まず「遺跡の立地」の問題について述べてみる事にする。佐賀県下とりわけ背振山南麓に於ける縄文時代の遺跡は山麓部と或いは山麓から平野へと変換する扇頂部付近に多く立地する。例えば、前者は三瀬村・富士町等に点在する遺跡群である。後者は東背振村・佐賀市金立町一帯に広がる遺跡群である。(註1)概して海拔標高500mから100mにかけて背振山地に沿ってベルト状に主に分布している。背振東南麓である鳥栖市に於いても、從来まではこの傾向にあった。例えば、海拔標高70～80mの群石山東南麓の門前地区、標高80m以上の笛吹山一帯、標高50m以上の荻野中位段丘上等に多く立地していた。しかし、本遺跡第3次調査区域は海拔標高24～25mの低位段丘先端部に立地する。

最近、縄文時代後・晩期の遺跡の発見が低地化する傾向が指摘されている。(註2)例えば熊本県菊池市天城遺跡・福岡県春日市柏田遺跡(註3)・福岡市四箇遺跡(註4)等がその代表例として挙げられている。天城遺跡は黒ボク土壤台地の一級下の標高40m前後の菊池川流域に所在している。条里制構造の確認されている古代からの水田地帯である事は、低地性という立地を示してあまりある。(註5)柏田遺跡は洪積層台地下の梶原川支流域の自然堤防上に立地し、海拔標高は20m前後となっている。四箇遺跡は室見川の形成する標高20～25mの高位扇状地上に立地している。

鳥栖地域に於いても最近の調査例では、低地での縄文時代後・晩期遺跡の発見が相次いでいる。但し、多くが旧河川状遺構の流れ込み土器であるという弱点はもっているが、海拔標高40m前後の扇状地上の古賀遺跡から前期轟式土器と晩期夜臼式土器が出土している。また

標高24mの段丘屈曲部先端に立地する長ノ原遺跡から夜臼式土器が出土している。三本松遺跡では予備調査であるが^g、やはり旧河川状遺構から後期西平式と思われるものや、晩期夜臼式土器等の土器が出土している。立地は沼川の扇状地で標高10m前後である。まだ検討の余地はあるが、低地性の縄文時代遺跡が多くなる傾向をこの鳥栖地域に於いても指摘できると思う。

現在、背振南麓一帯の平野部では大型圃場整備に伴う調査で、弥生時代の大規模な遺跡の発見が相次いでいるが、今後は縄文時代の遺跡の発見も期待できよう。

さて、本遺跡の立地条件と同じ傾向を示す他の遺跡について詳述してきたが、これ以降はその背景なり、もつ意味について考えてみたい。

他遺跡例では生産活動を支える道具類の出土について指摘してあるが、本遺跡では石器類にそれは認められない。限られた区域内でのしかも袋状豊穴とビットのみという限定からくる事からもしれないが、出土したのは石刀・スクレイバー等の生活用道具類のみである。但し、1点のみ性格・用途を明確にし得ない異形石器を含んでいるが、これとても生産用具とは考えられない。今後、本遺跡周辺での同時期の住居跡等の出土する遺跡の発見に期待したい。袋状豊穴の形態と機能については前項で述べてあるように、本遺跡出土遺構は從来までの縄文時代のものとは相違し、弥生時代のものに類似する様相を示している。その事と本遺跡の立地条件の在り様とを加味してみると、そこに何らかの生産活動の存在の可能性を窺わせる。袋状を呈するという形態からくる從来までの縄文時代の貯藏穴との相違が何を意味するのか、またその変遷が如何なる様相を示すのか、またその変遷のもつ意味等々の問題点について今後解明を試みる必要性は大である。しかしどもあれ、縄文時代晩期黒川式土器期に於けるその可能性を事実として一步進めたと言えよう。

以上が現段階で言及できる本川原遺跡全体の様相であるが、次にその成果の上に立って周辺遺跡との関連、とりわけこの地域に於ける首長層の墳墓について記してみたい。

まず、弥生時代には荻野丘陵上特に安永田地区付近に副葬品を持つ豪棺墓が集中している知見が現段階ではある。他の地区では大量に豪棺墓が出土しても金属製副葬品は知られていない。やはり今後も荻野・安永田地区に集中する事が予想される。後期の石棺墓については岸田遺跡・平原遺跡等で出土しているが、フケ遺跡では低いマウンドをもった石棺墓の存在が知られている。フケ遺跡もやはり荻野丘陵上にある。この時期の首長層の墳墓であると推測できる。本遺跡第2次調査時出土の6号・8号住居跡の時期がこれにあたる。本川原遺跡とフケ遺跡との直線距離は西方向に500mである。集落遺跡では、現在概要報告書作成中の平原遺跡がある。平原遺跡ではこの時期が、住居数の最も多い時期である。墳墓は台地先端部に何基か石棺墓があったと聞く。現在はその先端部は土砂取りで削られてしまっている。本川原遺跡のこの時期の住居跡が何軒になるのか不明であるが、平原遺跡とは集団的な何ら

かの関係があった可能性は指摘できると思う。

次の「本川原Ⅲ期」とした土器を出土する住居跡群の時期では、周辺遺跡にまだ類例をみない。それはこれらの土器が移入系統の土器を模した土器である事が要因かも知れない。次の「本川原Ⅳ期」を出土した方形周溝墓も周辺では類例をみない。これも前記と同様の原因が考えられる。今後の問題点として、他の類例の発見に努める事もあるが、何故本川原遺跡が「庄内式」並びに外来系の二重口縁土器を移入したのかについて追求しなければならない。

本川原遺跡方形周溝墓に後続する墳墓についてはまだ不明であるが、5世紀代になれば丘陵頂上に築造された箱式石棺を主体部とする平原古墳がある。これも詳細は整理中であるが、一応現段階では5世紀前半代のこの地域の首長墓と判断されている。この後は、竪穴系横口式石室を主体部とする太田東方古墳が掲げられる。しかし、厳密な時期判定は現在既に破壊されてしまっているので出来ないが、主体部構造と鉄丹の塗布から5世紀代後半に比定されている。(註6)これ以降に続く墳墓が、剣塚・岡寺・庚申堂塚等の前方後円墳となる。また、田代太田古墳も首長層の墳墓とみて間違いない。これらの古墳群の時期についてはまだ充分解明されていないが、庚申堂塚前方後円墳は1976年(昭和51年)に佐賀県立博物館により調査されている。その報告書によればこの古墳は、6世紀中葉頃に比定されている。(註7)また田代太田古墳は6世紀後半代とするのが一般的の見解となっている。岡寺・剣塚前方後円墳については詳細は不明であるが、上記2古墳より先行するものと判断されている。これは未報告であるが、岡寺前方後円墳の付近の烟から須恵器が出土している。この須恵器は編年Ⅲa期の古手か、やや先行するタイプと考えられる。従ってこの古墳は5世紀末から6世紀初頭にかけてのものだと現段階では推定される。剣塚前方後円墳は墳丘形態等から判断して、岡寺前方後円墳よりも先行するものと考えられる。東田古墳も前方後円墳の可能性が指摘されているが、その内容については不明である。

以上が、この地域に於ける首長層の墳墓とその変遷について想定してみたが、この問題は今後の軸跡群範囲確認調査の1つの大きな課題であろう。(文責 藤瀬)

註 (1) 木下之治他 「大門遺跡」『佐賀県文化財調査報告書8』佐賀県教育委員会 1972

(2) 賀川光夫 「繩文後期黒色磨研土器」『考古学論叢3』別府大学考古学研究会 1975

(3) 小池史哲 「柏田遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告4』福岡県教育委員会 1977

(4) 「四捨周辺遺跡調査報告書」『福岡市埋蔵文化財調査報告書42』福岡市教育委員会 1977

(5) 石橋新次氏の御教示による。

(6) 木下之治 「古代国家の形成」『鳥栖市史』鳥栖市 1973

(7) 志佐輝彦 「庚申堂塚調査報告書」『佐賀県立博物館調査研究書4』 1978

表2. 本川原遺跡住居跡一覧表

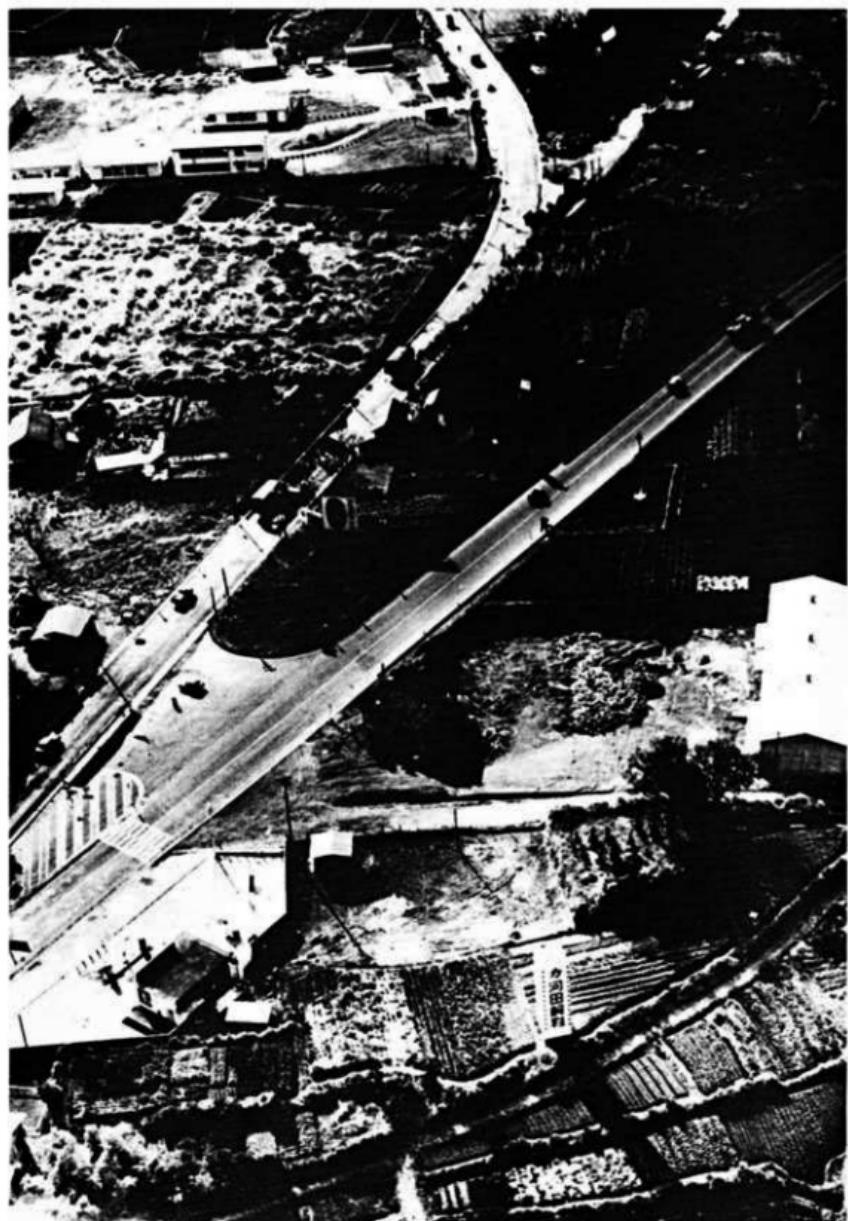
号	長辺×短辺	平面形態	立地	出土土器	その他	時期
1	5.25×4.5	やや長方形	東斜面	本川原II期		4世紀中
2	不明	*	*	なし		*
3	4.5×3.8	やや長方形	*	*	炉・周溝	*
4	5.1×4.7	*	*	本川原II期		*
5	5.3×4.0	長方形	*	*		*
6	7.4×4.6	*	頂上部	本川原I期	ペツド状遺構 屋内貯藏穴	3世紀末
7	3.2×2.8	やや長方形	北斜面	土師器	かまと	7世紀中以降
8	3.7×3.5	ほぼ方形	*	本川原I期		3世紀末
9	不明		*	なし		*
10	4.3×4.0	ほぼ方形	*	*		*
3-1	3.1×?	やや長方形	*	*		7世紀中以降(?)
3-2	3.25×?	*	*	*		*
3-3	不明	*	*	*		*

図 版



本川原遺跡航空写真〈南から〉

(1964年撮影)



本川原遺跡航空写真（北から）

（1964年撮影）



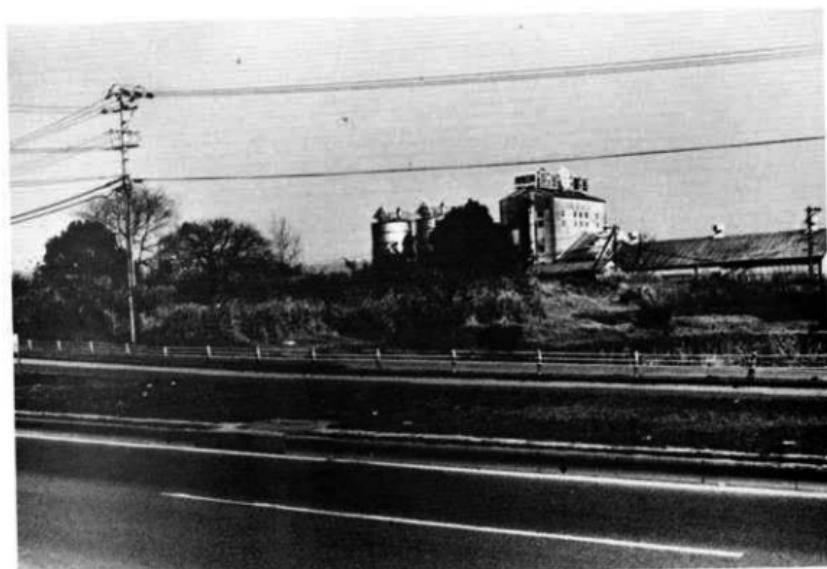
(1) 第3次調査区遠景〈北西から〉



(2) 第3次調査区遠景〈北から〉



(1) 本川原遺跡段丘〈東から〉



(2) 第1次調査区遠景〈南西から〉



(1) 表土剥ぎ後の状態〈北東から〉



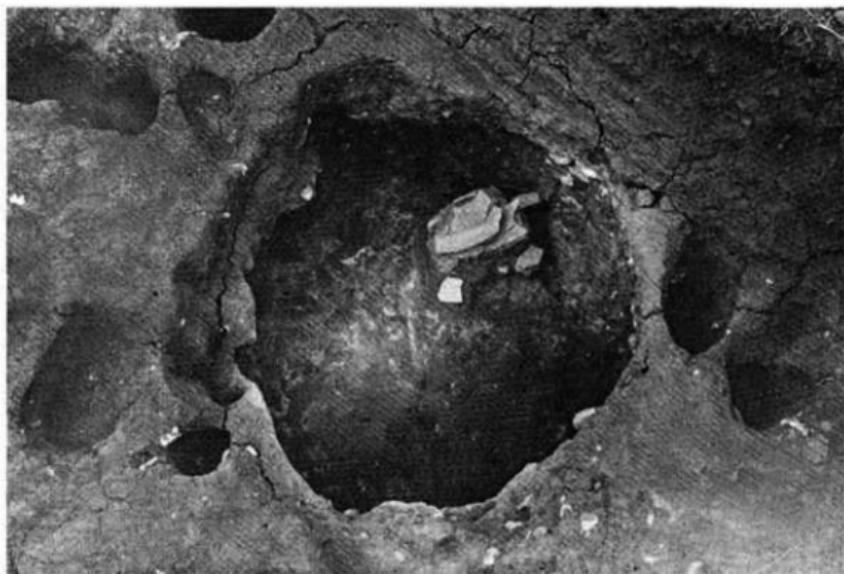
(2) 発掘区全景〈西から〉



(1) 発掘区全景〈中央から西へ〉



(2) 発掘区全景〈中央から東へ〉



(1) 1号袋状竖穴〈東から〉



(2) 2号袋状竖穴〈西から〉



(1) 2号袋状竪穴遺物出土状況



(2) ピット1土器出土状態



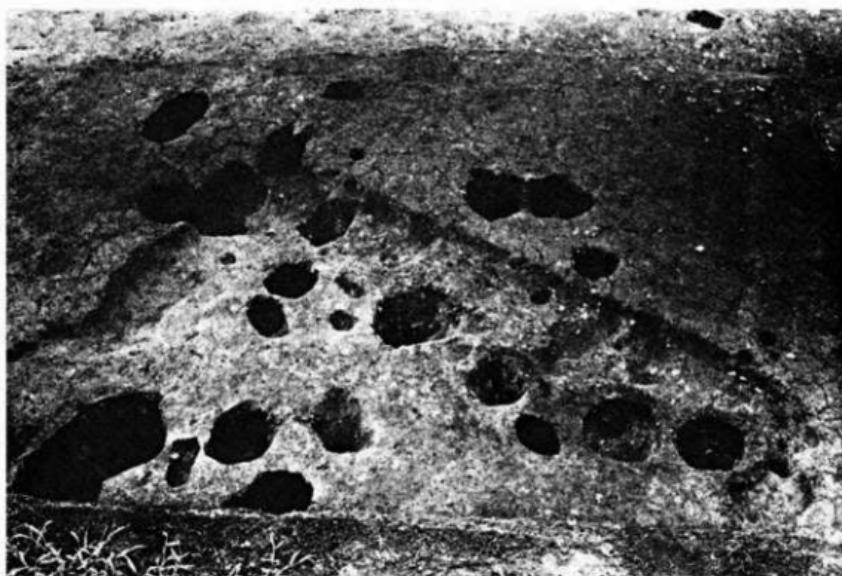
(1) 1号住居跡〈西から〉



(2) 1号住居跡・2号溝切合い状態



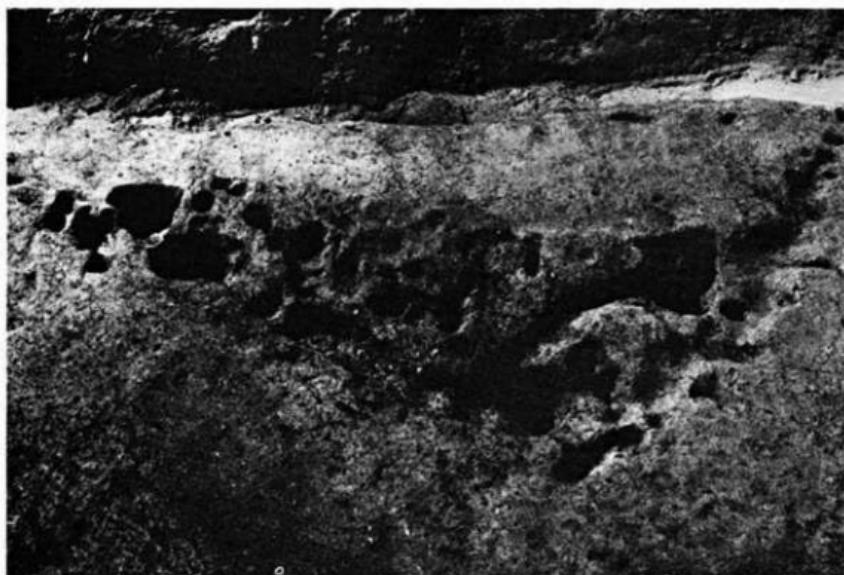
(1) 2号住居跡〈発掘前〉



(2) 2号住居跡〈南から〉



(1) 3号住居跡〈発掘前〉



(2) 3号住居跡〈南から〉



(1) 1号溝〈発掘前〉



(2) 1号溝〈北東から〉



(1) 2号溝〈発掘前〉



(2) 2号溝〈南から〉



(1) 1号溝土層堆積狀態



(2) 2号溝土層堆積狀態



(1) 縄文時代出土土器



(2) 石器



(1) 古墳時代以降出土土器



(2) 予備調査状況〈東から〉



(1) 発掘風景〈表土剥ぎ〉



(2) 発掘風景〈遺構検出〉



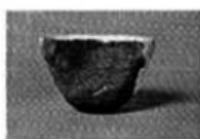
(1) 発掘風景 <遺構掘り>



(2) 発掘風景 <遺構掘り>



第1次調査方形周溝墓出土土器





(1) 第2次調査5号住居跡その他出土土器



(2) 第1次調査方形周溝墓土器出土状態

本川原遺跡

(第3次発掘調査報告書)

昭和54年3月20日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 佐賀県教育委員会

佐賀市城内1丁目

印刷 鹿島印刷株式会社

佐賀県鹿島市大字納富分2919-3

